女學雜誌

明……月廿八日發行

第六十九號

女學雜誌社

女鑑第六十九號目次

尼崎りや女



女　鑑　第六十九號

女　鑑

居家思想

婦人居家の思想は、既に、古と、今との異なるあれど、今日は、又、常と、變との差を知らざるべからず。古今の異なるは、今、更に、言はず。唯、一瞬の間に、機局の變あり、常其の常を失ひ、變其の時に際するものを觀て、之を、我が帝國今日の有様に鑑み、婦人居家の思想に推及ぼし、玆に、之を論せんとするなり。

我が國、既に、外に事あり。是、實に、非常の時なり。此の有事非常の時に當りて、我が忠實なる國民は、皆、各、其の身の分限に應じて、國家の爲めに盡くさんと謀らざるものなし。或は、其の才を以てし、或は、其の力を以てし、或は、其

の財を以てし、報國に苦勞すること、明著なり。男子、既に、外に勞する斯くの如し、婦人家に在り、室を守り、其の天職を全うせんとするに、豈、獨、非常の大決心なかるべけんや。

抑、將士の、外征の命を受けて、既に、戰地に臨むは、即、其の本分を盡くすの時至れるなり。されば、其の生別は、即、是、死別たるのみ。是に於いて、之が婦女たるもの空く、離別の情を傷み、轉、征夫をして、低徊躊躇せしむるが如きあらば、果して如何。又、幽閨孤房、中宵悲嘆して、遠人をして、其の心を挫折せしむるが如きことあらば、果して如何。古昔、漢土の詩人が、周の末世に方りて、婦人が征夫を思の情を謠ひ、又、唐代の騷客が、漢の中葉北征の將士の婦妻の情を述るの歌曲を觀るに、大抵、前者の情緒に纏綿せられたるものゝみ。我が國の婦

女子の勇武剛腸なるに如かざること遠きを知るべし。
今や、我が國の婦女中には、既に其の子を失へるもあらん。又、其の夫を失へるもあらん。又、其の父を失へるもあらん。其の兄弟を失へるもあらん。嗚呼、是、常情より之を觀れば、亦、誠に悲み傷むべきの極なり。然れども、國事に殉し、本分を盡くすは、亦、不幸にして、不幸にあらさるなり。故に、悲傷哀痛は、已むべかざるも、其の芳烈は、千載滅せざるなり。此が妻女姉妹たるものは、愈、益、其の貞節を守り、其の家を治め、其の名を辱めざらんことを計るべきこと、固より、言を待たざるなり。

嗚呼、今日の居家思想は、平常を以て準とすべからず、須く、昔時、戰國時代の武士の妻女が懷ける思想を以て、標準となし、最、義理の際を明にし、未練の醜體を脫し去るべきの時にこそ。

論説

徳川時代女子教育史評論（六）

岡崎遠光

二、同時代女子教育の要概（下の二）

加賀の千代女の訓誡の如く、士族の婦女子は、治世に在つては、其容貌、言語を愼み、亂世に遭うては、其身命を惜まずして、貞操義烈の譽を得しならむには、婦人の職務、茲に、全く、終りぬ、といふも不可なかるべし。然るに、徳川の初めは、武士の川水、いと清み渡りて、其の妻子も、自、他の三民の妻子とは異なりしかど、其の太平に流れし極や、終には、家庭の教育も、自然、規律を失して、前の質朴淳良なる風は、失せ去りて、遊藝三昧に耽けり初めたり。即、「昇平夜話」が、寛政年間の武士の婦女を評せる語に、「小歌、三味線、踊の類は、昔は賤しき

ものとして、中等以上の人は、習ふ事を耻としけるに、今、寛政の頃になりては、武家の子女は、巳が一藝と心得て、却りて、知らざるを耻とす。凡そ、女子は、深窓に生れて、人の前に出づることなきに、今は、男子の會席へも連りて、人に興ぜられ、自も、酒飲みて、耻しき色もなし。婦女の外出する時、昔時は、氣儘とて、黑き絹にて、頭面を包み、目ばかり顯しけるが、其後、綿にて、頭面を包みしは、我が二十歳餘、寶永の頃までなりき。今、寛政となりては、小き綿を、頭上に戴きたるのみにて、打晒し、晴やかなる顏なりと見えたり。前にも、聊、述べし如く、三味線、小歌の類は、一二取るべき事はありと雖、多くは、猥絶陋絶の所作を面白く綴り、下等社會の婦女兒童の耳を娛ましむるものなり。然るに、武士の婦女たる者が、之を習はざれば、耻となしぬる時代は、既

に、徳川の流れ、濁り初めし時にして、又以て、其の世變如何を察知するに足る可し。

深窓に育ちて、人の前に出づる事なし、といふ主義の行はれしは、今は昔、婦人を籠の鳥と思ひし、世の事にて、今日に在りては、女子其人は愚、男子にても、肯はざる事なれば、吾人は、唯、歴史的探究の時、かゝる不法の事もありきと思ひて、彼等婦人の爲に、いとも氣の毒に思ふのみ。然れども、又、男子の會席などに出でゝ、顏赤らめ、詞囀づり、小歌謠ひ、三味掻きならして、さながら、白拍子、うかれめの如く、人の座興を助けし婦人、而かも、武士の婦人ありしを見る時は、吾人は、却りて、前者の、婦人の天性に遠からざるを、賛せずはあらず。たとひ、籠の鳥にても、鶯の如く、花さそふ聲するは、人いみじく愛つべき

も、飛翔自在なりとて、雲雀に似て、口喧しきものは、人の厭ふは、いはずとも
の事よこそ。

さて、次に、論はむとするは、農家の婦女子の事なり。『農家調寶記』の正續に、委しき記載あれど、茲には、矢張、千代女の論、面白ければ、引出しぬ。「農は其の業賤しといへども、上、御一人より、下、諸萬人の食を作り出す故に、次序、工商の上に在り。其の妻たり、女たる者は、養蠶、織機の事は云ふも更なり。晝は、野前の餉を持運び、夜は、月下に衣を擣ち、粗飯粗服し、耕作の業、盛なる時は、夫と共に、朝の風に梳り、夕の雨に浴し、霧を犯し、霜を踏みつゝ、粒々の辛苦を下傳ふなれば、丈夫も及ばず、疲勞すれども、毎々打開きたる曠野、山水の絶景を眺望し、氣樂なる世渡りなれば、心も悠に、自、長壽を保つべし。農

家には、先祖やんごとなき人の裔、代々連綿として、筋目正しきも多し。質素を本とし、奢侈なく、如法の風俗うつり變らぬやうに、子孫遠長の相續を心とすべし。』此文字は、教育には、緣遠きやうに見ゆれども、古の農家の女子は、其の家、頗、富める者の外は、絶えて、教育らしき教育を受けしものなかりき。故に、先此の種の議論によりて、其の一斑を推測するより外、詮方なし。商人の子女に、『商賣往來』といふ、專門の教課のありしに似て、農家の子女が、文字を習得する時にも、かゝる便利なる手本ありき。之を『百姓往來』といふ。『女大學』『女今川』よりも、農家に取りては、重寶なるものなり。故に『お師匠様』、之を習字帖に用ひぬ。

古の農家の子女は、たゞ、夫、働くに在りき。朝は、星を戴いて、野に出で、夕

は、月を負うて、家に歸れり。養蠶、機織に從事する能はざる年齡迄が、文字の知識を得る教育時代にして、十歳を僅にても過ぎなば、實業を修練する教育時代となりて、此時より、働きに働きて、其の長上の爲に、身骨の勞を厭はざりしなり。且、古の農家は、全體、率直律義、絶えて、輕浮の風なく、たとひ、其の物、惜むらくは、愚に近かりしとはいへども、亦、隣保相愛し、長幼、能く、其の序を守る、良俗に感染せしを以て、益軒、蘭山等、諸先生のものせる、女子の教課書が、巡回の勞を取ること少かりしも、自然、其の大本を誤らざりしものゝ如し。養蠶、草刈の手傳を以て、今の小學校の課業の如く思ひ、田植を滿足に仕遂ぐる事を得ば、高等女學校を卒業せる心地したりしならむ。而して、彼等は、養蠶し、田植する際に、社會的教育を受けて、道理も曉り、人情も解し、嫁

となり、姑となり、又、其の子孫の養成法は、已が、曾て、養成せられし故轍を、其まゝ應用しぬ。

女子處世論（八）

三輪田眞佐子

第八　婚姻及婚姻の後（つゞき）

早婚の弊も、既に、要言に論せしごと、全く、人の妻たり、母たる資格なくして、嫁するは、一生の不幸なるらむ。さるに、其の父母たるもの、之を悟らざるにや、未精神をも發達せず、身體をも完成せざる少女をして、充分の教育を待たで、疾くも、嫁せしめて、目前の安樂を買ひ、以て、父母たる責任を免れんとするものあり。あはれ、之を、不慈の父母と言はずして、何とか言ふべき。苟も

人の妻たるものは、是非、普通教育はかりは、之を修め、もて、一家を維持し、良人に事へ、舅姑を安じ、子孫を敎へ、婢僕を御し、及び、世人に接するに足る心術を研き、技量を養はざるべからず。必竟、女子をして、專門學は、兎も角普通の學校に入らしむる父母たち、其の孃をして、獨立の生活をなさしめんとするは、從なる目的にして、他日、良妻賢母となりて、未生の幸福を得せしめむこそ、主なる目的なれと辨へざるべからず。あな、世の女子を持てる、慈悲ふかき父母たち、之を思ひ誤りそ。

斯の如き、準備をなしたる女子にして、始めて、婚姻すべきなり。然るに、偶門地高きを利用し、あるは、容貌美なるを利用などして、嫁するを以て、自足れりとするものあり。勿論、彼等は、婢妾の業はかりは、辛うじて、なし得

んも、良人と、精神上の契托をなし能はざるのみならず、到底、繁き家政を主りなば、恒に、心中、怏々として樂む能はざるは、鏡にかけて見んが如し。これ等は、婚姻して、反りて、苦勞を被ること、大なるものぞかし。蓋、世の父母は、娘の婚姻すべき時期に遲れじとのみ恐るゝを以て、其の二八の妙齢を利用せんとのみ思ひ、遂に、完全なる敎育を受けしむるに遑あらで、嫁せしむるめり。聞く、我が日本女子初婚の平均年齢は、十九歳三、四ヶ月なるに、英國は、二十六歳、米國は二十八歳ほどなりと云ふ、熟思ふに、そは、風土によりて、聊、差別あるべきものなれども、概、斯ゝる、不完全なる時期に於いて、なす結婚より、一家の和合を妨げ、國民の羸弱を來し、自己の不幸を招くことも、少なからずと云ふを得む。希くは、世の風潮完成の女子にして、始めて、嫁せんやうに向は

んことを。若し、徳を修め、智を練りつゝ、好縁を待たで嫁くものあらば、おのれは、敢て言はん、斯かる女子は、終始獨存せんよりも、何、不幸の境遇に陷らむ、誠に、鑑みるべきことにこそ。見よ、祇女の怨恨は、不正の縁に基き、阿佛尼の不幸は、義子の故より起りしにあらずや。且、蓮月尼も、不幸に逢さりせば、いかで、佛門に歸し、獨存を求めんや。

如何なる良人を撰ぶべき乎。曰く、心は、信實に、體は、強壯にして、然も、財資は、富裕なる人を撰ばんには、遺憾なからむも、斯くの如き十全は、萬人の得て望むべきことにあらざれば、以て、一般の標準となすに足らじ。故に、良人を撰ぶ標準は、先、德實なるものと定むべし。其は、苟、人の妻たるものは、終始を共にすべき目的を有するを以て、德實ならざる人とは終始を共にせんこと難

けれはなり。萬秋門院のよみ給ひし「かくて世にふるの高はしゆく末も君をはたえず頼みわたらむ」なる歌は、皆、婦人の懷くべき心はへになむ。次に、身體强壯なるものと定むべし。こは、一度人の妻たれは、夫の爲には、水火の勞なりとも、歡びてなさゞるべからざるものなれは、豫め、壯健なる人を撰はずは、異日、共に、不幸に陷らんとき、如何ともなし難からむ。されど、おのれは、女子に、利己主義を勸め、道ならぬ安樂を得しめん意見にはあらず。必や、病める良人を、懇に、介抱し、亡き良人の名家を全うせん大責任を、女子に負はしめんと思ふを以て、若、其の責任重きに過ぎ、反りて身の累をなさんものもあらんかと、憂へはこそ。病夫を助けて、名高き飛彈の衞女、及び、常陸の佐與女の如きは、身は、農夫の妻なりと雖、世の高樓大閣に住む婦人さへ、斯ゝる大責任を全

くするもの、果して、幾人かある。
なほ、女子は、止むを得ざる場合にあらざれば、離婚すべきものにあらざるをもて、婚姻に先ち、能く、正すべきものは、第一、性癖なき人なるか否やにあり。即、酒癖ある人は、生、素、たとひ徳實なりとも、往々、一家を滅さん基をも起すことさへあらむ、女色に沈める人も、同じ。第二、遺傳病なき人を撰べ。抑、遺傳病は、子々孫々の不幸となるべきこともあらむ。殊に、黴毒の如きは、直接に、妻たるものゝ不幸を醸すこととならむ。往時は、人、各、其の産地にありて、廣く、天下に活動するもの、殆、なかりしを以て容易に良人たるべき人の素性を正し得んも、今日の社會は、さながら、稲妻の、昨日は東、今日は西に飛び行くに髣髴たる生存の情態なれば、其の素性を知ること難し。況て、昔日

の人は、質朴にして、廉恥を重じたるを以て、黴毒の流布、目下の如く甚しからざりけん。若、有識者にして、斯る、人德の欠點を、恬として顧みざるときは、大酒家の子は、羸弱になり、瘡毒者の子は、不具となり、焉ぞ、強健なる國民を作り得ん。あはれ、國民たるもの、誰か、劍太刀御國の光り雄々として、宇内に輝かんことを祈らざらん。而して、強國の源は、一國の母たる女子を教戒するに若くはなし、嬢たち、亦、斯くの如き高尚の見識を持ち給ひてよ。

藤原伊佐緒

つゝしみの道は、おきふし行かふあひだに、こころみ、一念のきざし、一言の詞のうへにかんがへ、しづかなる時、くらからず、うごく時、たがはず、心なつけゐるにあらず、つけざるにあらず、鳥のかいこをさるが如し、さだまへたるこゝ、いさようこゝろみ侍るべし

（[illegible]錦）

尼崎りや女

大町桂月

咲き亂れたる川添ひの櫻よ心惹かれて手折らむとするに、いたう醉ひたれど足元定まらず、おぞくも滑なる苔石を踏みそこね、雪を噴く怒浪の中に陷りて、身は空しく水底の藻屑とならむとすらむ。あはれ、花には罪あるにあらず、人の心を蕩したる酒に罪あり。酒には罪あるにあらず、酒に本性を奪はれたる醉漢其人に罪あるなり。

德川の流澄みて人は太平の花に眠れるころ、丸龜の城下、京極侯の足輕に、尼崎幸右衛門といふものありけり。その妻、年なほ若くして容色世にすぐれたり。巫山の神女は知らず、蓬萊の仙女も知らねど、氷姿娟々として細腰綺羅に堪へず、明眸嫣然として一笑城を傾けむとするばかりの美人なるに、うまれつき優婉にして、いとまめやかに所天にかしづきけれど、其噂一藩に高く、あはれ、丸龜の花、讃岐の名物、足輕風情の手活には惜しき種なりとぞ人々云ひはやしける。

幸右衛門の同役に、岩淵傳内といふものあり。武藝にはうとからねども酒の癖惡しく、ある夜幸右衛門の家に行きて、あるまじき戯言に遺恨を重ね、いたく言ひはづかしめられて、慚屈のあまり　腰なる脇差拔く手も見せず、躍り上つて幸右衛門に斬りつけ、後をも見ずして逃げ去りたり。急所の痛手に倒れ伏して呻く夫の身の上こゝろに懸れど、眼前の仇を見遁すに忍びざれば、幸右衛門の妻はいちはやく夫の刀を拔きはなち、雪よりも白き素足に月影をふみて追ひかくるに、敵はひた走りに走りて見返りもせず。心ばかりははやれども、女の足のはかなさ、石に躓きて倒れむとするを、幾回なるを知らず、生爪剝げて鮮血地を染め、息もたえ〴〵になりて、からうじて追ひつかむとしたるに、身をひるがへして、いよ〳〵早く走るに詮方なく、追ふ事も最早是迄なり、夫のかたき思ひ知れと云ひさま、力を込めて刀を投げゝるに、ねらひ誤らず、右の肩に中りぬ。されど傳内はなほ見返りもせず、手もて瘡口を抑へながら、脫兎の勢いや增して韋駄天も啻ならず、かすみ込めたる春の夜の朧月にうつる影次第にあはく、姿は花に消えてゆき方知らずなりにけり。

傳右衛門の妻は足を早めて歸り來り、夫の創は如何にと取りすがるに、無慘や、鮮

血暈に溢れて三寸息すでに絶えたり。袈裟切りにきり下げられたる創深くして兩手空しく恨を握り、顔色青ざめて眼なは瞑せず、虚空を睨んで倒れたる五尺の體をこの世の置土産にして、二十五年の一期の夢はさめてけり。妻は在るにもあれず、いたはしや我つま。不意にうたれて日頃の手並をあらはし給ふに由なく、傳内づれの奴にかゝりて、むざ／＼と最後をとげ給ひしは、如何に口惜しくおはしけむ。かくばかり深手とはつゆ知らず、仇を討ちたきばかりに、夫の創のてあてを他所にして傳内を追ひたることぞ、今更思へば口惜しきことの限りなりき。それも首尾よく討取りたらばまだしもなれども、わづかに肩に創を負はせたるのみにて、やみ／＼とのがしたる腑甲斐なさ。許してたべ我つま。一世の別と知りなば聞くべきことも多かりき。言ひたきことも多くおはしけむ。思へば呂翁嚢中の枕の契り、殘る甲斐なき我身の上を、千行の涙を袖に絞りて泣きわぶる聲に、りやと呼べる娘の兒の今歳わづかに二歳になりたるが目をさまし、乳を求めて泣きたつるに止むを得ず、抱きとりて乳房をふくませければ、やがて飲み飽きて機嫌よく、母の膝より這ひ出でゝ、春の蕨の如き手もて息絶えたる父の顔を撫でつゝ、笑をふくみて眺むるさま、見る

に胸つぶれて袖の雨いよ〳〵ふりまさり、咽び入りて途方にくれ、前後も知らず泣きふしけるに、山寺の鐘いつしか殘月を撞き落して、をちこちに鳴く雞の聲白し。二世を契りたる夫は既に白玉樓中の人となり、夫を殺したる傳内は逐電して行方をしらず、閻浮提の望つきて偏へに弘誓の船のみたのまるれど、りやと呼べる一粒種の愛兒の幽明二界の鎖となりて引留むるに、命もしかすがに捨られず、妹の夫なる關根元右衛門といふ人の家に身を寄せ、念佛三昧に明し、くらしけるほどに、玉琴の緒二世の縁と共に絶え、鸞鏡の塵胸中の恨を共につもり、もだえ〳〵て身もやうやう弱りゆき、果ては病の床に就きて重き枕あがらずなりにけり。夫のかたみとて、りやを撫育めども、女の子なれば、父の仇はえ討たじ。かくては夫が修羅の妄執は何日かは晴れむ。ながらへてあるもうれたく、また何の面目ありてか死して夫にまみゆべき。世にはかなきものは我身なりとて、ひた泣きになきければ、病ます〳〵重りて旦夕を知らぬむかり危うなりぬ。知死期も最早遠かるまじと知りけむ。妹夫婦と孤兒とを近く呼びよせ、是迄何くれとなく心をつくされし恩義は言葉につくされず。その恩をつゆむかりも酬はずして、我身はあへなくも死果つることの本意な

さ。此上にたのみまゐらするはりやの事なり。東西わかぬ乳呑兒なれバ、今言ひきかすとも甲斐なし。生ひそだちなバ、妾の爲に御恩をかへすやう說き聞かし給ひてよ。女の身にしあれバ、父の仇はえ討たじ。せめては、義に勇む俠氣の人あらむ、婿に取りてなりと、仇をうたしてたべ、我等夫婦の墓前には香華の手向もほしからず、たゞ仇の首をとりて手向けらるゝが何よりの供養、善知識の引導にもまして嬉しう成佛せむと、聲もたえ／＼に言ひ終る間もなく、あへなく息は絕え果てゝ、あたら、丸龜の名花は散りにけり。

時にりや年わづかに三歲。元右衛門夫婦のもの、我子の如くいつくしみて、蝶よ、花よとめでけるほどに、幾度の雁を送り、燕を迎へて物心覺ゆる年頃になりぬ。或日元右衛門夫婦はりやを近く呼びよせて、眞の父は岩淵傳内に殺されしこと、眞の母はりやの女にして仇を討つに足らぬことを苦にやみて空しくなりしことなど、精しく物語りけるに、りやは涕にくれて叔母夫婦に向ひ、かゝることゝは夢にも知り侍らず、御身たち二人を眞の親とのみ思ひて、あだに月日を過したるころくちをしけれ。思へば御養育の恩山よりも高く、海よりも深し。ふつゝかなる身にしあれバ、御

恩の萬一を酬いまゐらすることだにおぼつかなく侍り。されど一寸の虫にも五分の靈ありとかや。よしや女子なれども、難波なる、みをつくしても親の仇はうちらまゐらせむ。さな案じ給ひぞとて、養親をいさめ、自からも勇みけることそ殊勝なる心なりしか。

りや今年は十六歳になりぬ。かんばせこそ其母よりは少し劣れども、溢るゝばかりの愛敬ありて、さき出たる初花の風情も啻ならず。しとやかなることは母に似て、しかも心のをゝしきことは更にすぐれたり。讐を復せむとするこゝろざし止みがたく、最早空しく月日を送るべきにあらず、普天の下、率土の濱、草をわけ、露にやどりても、いかでか仇を尋ね出さで置くべきを、心さだめて叔母夫婦に向ひ、いまだ御高恩の萬一を酬いまゐらさねど、妾も年巳に長じたれど、まづ、人の最も多く集る花の江戸に出で、人の家の婢女となりて、あまねく仇を尋ねむとこそ思ひ侍れ。この事許させ給ひてよと請ひければ、叔母は驚くこと一方ならず、志はさることながら、知る人もなき處にゆきて仇を尋ねむなどゝは、女子の力に及ぶべきことにあらず、よし、仇を尋ね出したりとも、彼は力つよく、武藝にもたけたる男子なれば、か

へりうちに逢ふとも、首尾よくうち取ることは期しがたかり、待てば甘露の日和とやら。亡せし母御の遺言もあれど、今暫らく見合はす心しと止めけれども、せちに請うて止まねば、叔母夫婦も遂にとゞめかねて許しつ。折しも同藩の士、村瀬藤馬といふ人江戸に上らむとしければ、りやの身の上を語りて、伴はれむことを請ひけるに、藤馬其志に感じてたやすくうべなひ、りやを伴れて丸龜を立ちいでぬ。海路十六里、征帆順風を孕みて孤舟恙なく明石の浦に着し、これより百四十里の長程、靑鞋板橋の霜を蹈みて曉にうまやをいで立ち征衣山上の雲を帶びて夕にはたごやに宿り、萬頃空を浸せる琵琶湖の深きに臨むにつけても、兩親の遺恨の更に深くして、いとゞ仇の在所を知りがたきをかこち、八朶雪を戴ける富士山の高きを仰ぐにつけても、叔母夫婦の恩の更に高くして、偏へに酬ゆるの期なきをなげきつゝ、日數へて江戸よ上り、よきつてを得て、永井源介といふ旗本の家に召使はるゝこととなりぬ。言語といひ、擧動といひ、婢女には稀なる心掛なるに、源介早くもたゞものならずと思ひてその身の上を問ふ。問はれてりや隱すこともなく打ち明しければ、源介いとど憐みて暇ある毎にねもごろに刀太うつわざを敎へけり。りや固より穎敏なる性な

るに、仇を復せむとする念慮なりければ、一を聞て十を知り、半年も立たぬうちに早くも上達して、男子にもをさ／＼劣らぬばかりの手きゝとなりにけり。さる程に源介りやに向ひ、かくまで上達したれば、仇をうつこともかたがらじ。今は仇を尋ね出すことこそ肝要なれ。我家にありていたづらに月日を送らむよりは、あまたの家に事へて、ひろく仇の蹤跡をさぐるにしかずと諭しければ、りや悦びて之に從ひ、厚くその恩を謝して永井の家をいで、十二年の間、主を代へて、事ふること七十家の多きに及べども、未だ仇には遇はざりけり。

最後に本所なる旗本坂部安兵衛の家につかへぬ。其家に小泉文内といふ小者あり、年五十餘にして骨格たくましき男なり。平生錢を得れば酒に醉ひ、酒に醉へば大言を吐て人を驚かすを常とせり。或夜いたう醉ひ、口角沫を吹いてくさ／＼の自慢話をなしけるが、ふと感慨に堪へぬおもゝちをなし、我今はおちぶれて小者となり居れども、もとは、一合取つても武士のはしくれなりき。若氣の誤り、同役の人を斬りてにげ去りけるに、其妻追ひ來り、刀を肩に投げつけられて、創を破り、からうじて逃げおふせたりき。其折もさながら今夜の如き朧月夜にして、今夜の景色を見るにつけ

ても、當日の事の思ひ出されて、昨日の如き心地せらるれど、指を折れバ早や三十年の昔となりにきなど語るに、りや聞て心動きたれど、わざと顔にはあらはさず、其はまた例の法螺ならむ、御身はかゝる大膽なる事をなせる人とも見えずと、すかして問ひかくれた、文内は得意顔にも肩を拔きて刀瘢を示し、これが其時受けたる創痕なり。當時は岩淵傳内といひしが、今は小泉文内と改め、故郷の丸龜を立出でゝ江戸三界にわれも人目を憚ることもなし。且つ我殺したる同役には一人の子ありたれども、そは女の子なれバ仇討などは思ひもよらざるべければ、我は最早慮ることもなきなりといふ。げにや、天に口なし、人をして言はしむ。天網恢々、疎なれどもいかでか洩らすべき、始め酒に人を誤り、終に酒に身を亡ぼす。自業自得とや云はむ。はた孝子の誠心の致す所とや云はむ。兎にも角にも憫笑すべきものは小人の痴情なりけり。

既に此確証を得たれバ、最早片時も躊躇ふべきにあらずとて、翌朝、暇を乞ひて、永井源介の家に往きて其由を告げゝれど、源介大に喜び、直ちにりやと共に京極侯の邸に抵りて村瀬藤馬にかくと告げぬ。藤馬も聞いて喜ぶこと限なく、上に訴へ、

やがて傳内を捕へて囹圄に入れ、罪狀判然したれバ、京極侯、命じて其下屋敷に竹の柵をしつらはせ、日を定めて、竝に勝負を決せしめらるゝことゝなりぬ。りや時に年二十八。年來の辛苦にやつれたれども殘花のかをりゆかしく、綠の黒雲を春風になぶらせ、鎖帷子を下に着て身を固め、白布の鉢卷を締め、大小兩刀を腰にして出たるは、りゝしくも又勇ましかりける打裝なりけり。傳内と顔見合せて、やをれ傳内、父の仇思ひしれと呼びかくれバ、傳内は濁聲はりあげ、高の知れたる女の細腕にて讐呼はり、かたはら痛しとあざけり笑ひ、段平上段にかまへて、いざ來れといふ。一心こめたる烈女のきつさき受け損じて、もろくも肋を斫られぬ。こはかなはじと、刀取り直して正眼に構ふる間もなく、また面部を斫られて心膽し、二足三足たぢろくにつけこみ、りやは勢鋭くぐさとばかりに腋を刺したるは、げに目ざましき剽技なりけり。三刀するどく斬りつけられて傳内はうんと一聲、後に倒れて動きもせず、りやは脇差を拔いて、靜かに其首をかき落し、鮮血滴るまゝに提げて撿使の前に至り、うれしや、今日こそ二十餘年の志をとげたれ。あの世にいます父、母も修羅道の苦患を免れてやをはすらむと云ひつゝ、仇の首をさゝげ出せる勇

しさに、並み居る人々思はず手をうち、やんやとばかり賞めそやす諸聲につれ、吹き來る一陣の東風にさそはれて、ひら／＼と烈女の袖にちりかゝる三月の晴雪香し。京極侯此事を聞し召され、足輕の娘なれど、其行は士大夫も及ばず。旌表せずもあるべからずとて、りやを士格にのぼせ、姫君の侍女に取立給ひければ、りや主恩のあつきに感じ、かしこみ事へて、忠勤怠らざりきといへり。纖手よく親の仇をうちたるは、此上もなき孝兒なるに、士格にのぼりて、名を揚げ、家を興し、父母の名をも彰はせり。世に之にましたる孝の道の終やはある。姫君の侍女となりての後の事跡は傳はらねども、忠臣、孝子の門より出づと云へる、その忠勤の事蹟想ふべきなり。是なんまことの丸龜の花なりける。

小田加津麻起姉妹の事

松山清心

小田加津麻起姉妹は、岡山縣備前國兒島郡甲浦村大字郡平民小田常三郎の女なり、家素より貧にして、他家の田畑を耕し、漸く糊口を凌けり、母志滿性質羸弱に、父は酒を好み、屢々衣什を典賣して酔を買ふ、是を以て家道全く衰へたり、二女天性

至孝、窮苦の内にありて常に頑父の意を慰め、敢て少しも忤ふことなし明治三年の冬、常三郎、一朝病を得て、不幸にして起きざりしかバ、二女は、愁嘆措く能はず殆狂せんとするに至れり、且、是よりして生計の途全く杜絶したり、時に加津は年十四、麻記は十二なり母は其の軟弱にして些だに為すことなく、饑渇の旦夕に迫るを憂ひ、日夜悲嘆す二女は之を憂ひ、百方慰藉し、或は他人の婢となり、或は蔬菜を鬻ぎ、百難千苦漸くに細計を營むに至る、斯の如くする數年、其間孝養具に至る母亦病に臥す、二女大に憂ひ、晝は勞働の餘暇、必ず傍に侍して撫養を竭くし、夜は神佛に禱請し、終宵看護し、衣帶を解かず、人其至孝にして薄命なるを憐み、之に金穀を與ふるも、辭して受けず、專ら自ら勞苦して以て孝養に汲々たり、或日麻起竊に姉に語りて曰く、母病既に數月肢體漸々衰弱するに、生計貧窶にして、充分療養に其途を盡す能はず斯の如くするときは、遂に或は快復の期なからんことを恐る、妾請ふ出で、他家の婢となり、以て療養の資を辨せん、然れども獨り看護の勞苦姉の一身に集るを悲むと、姉の曰く、妾平生恃むところは妹一人のみ、看護の勞苦は、敢て意とせざる處なるも、妹と別れて將た何をか樂まんと、因て相擁して

泣く、其至孝愛情深きを聞くもの涕を注がざるなし、痲起遂に出で、數里の外岡山の地に至り、某の家に婢と爲る、是に於て、加津は愈母の看護に力を專にし、日夜病蓐に侍す、暇あれば隣家に米を搗き、或は他人の衣を洗ひ、裁縫を爲し、僅かに得たる賃錢は、悉く母の藥餌滋味の料に供す、妹亦主家より得る俸錢は、悉く姉に送りて毫も自から費さず、然るに母漸々頑癖の性と爲り少しく意に介することあれば、大聲して加津を責む、然れども加津毫も厭色なく、只管自巳の孝養の足らざる所爲なりとして、益勉めて止まず、母の明を失ひて寸歩も動く能はざるに至りてや、兩便一に加津に倚る、然るに加津遂に怠りなし、二女素と容色有り、人の屢婚嫁を勸むるあるも、加津之れを肯せずして曰く、他人交れば孝養專らなり難し、妾は、唯妹の早く他に嫁せんことを望むのみと、妹亦肯せずして曰く、姉は終始病者に侍し、其勞劬妾の比にあらず、吾焉んぞ獨り母と姉を棄て、他に嫁するに忍んやと、其節操の凜乎として動かざる斯の如し、今に至るまで二十有餘年の久しき、其孝順友愛の情深厚なる一日の如きを以て、玆に明治廿七年五月岡山縣知事、其至孝を嘉みし、褒詞金圓を賜ひて深く之を賞せり。

漫錄

才女逸話（二）

山崎庚午

四、萩の尼、

萩の尼瑞祥院は江戸の人にして、多く得がたきの才女なり、曲亭馬琴と深く交はりしが、ある時、尼より、服紗に物を包みて馬琴が許へ贈りけるに、馬琴そをあやまちて、火桶の中に取り落し、燃やしければ、わぶるとて、

　こがれつゝわたしかねたる川舟の
　　かせのふくさにいとゞくるしき

こかれふくさの文字を詠み入れたる歌と共に彼の服紗をかへしけれど、尼の返歌に、

　よの人のたぐひにあらずまめなりや
　　けふくさの戸にかへすこゝろは

一首のうちにやけふくさの五文字を詠み入れたるなど、其才のほど感ずべきなり、

五、了然尼、

了然尼、名は總、武田晴信の曾孫なり、少くして、東福門院皇后に仕へしが、皇后の崩後、江戸に歸り住ひ、武田壽菴の妻となりて二子を生む、深く佛を信じて、出家の志ありけれど、壽菴のため、特に妾を買ひ、己れは去りて釋鉄牛の許に至り、其弟子とならんと乞ふ、鉄牛、此女の容色美なるを見て、これ法魔なりと罵りて、弟子たるをゆる

さず、止むを得ずして白鷗のもとに至りしも、亦ゆるされず、了然憔然として家に歸らんとする時、過ぐるところの市中の一家に、炭火を熾に盛りたる火鉢あるを見、いつはりて之を借り、見るまねして自ら覆へし、己れの面を燒く、市人大に驚くと雖、尼平然としておもへらく、不具の醜容何處の寺門にも入れらるべしと、遂に白鷗の弟子となる、その面を燒ける時詩を作りて曰く、

昔遊宮裡燒蘭麝　今入禪林燎面皮
四序流行又如此　不知誰是箇中移

そのゝち、武州落合村泰雲寺および蓮乘院に住して中興の開山となれりとか、年六十六にして寂す、辭世の詩あり、

六十六年秋已久　凛々月色向人明
莫言那裡工夫事　耳熱松杉風外聲

嗚呼、了然は一女子のみ、しかも其志の堅きは金鐵をしのぎ、其行の潔く高きは、松栢に伍す、古語に、三軍帥を奪ふべきも、一人志を奪ふべからずと古人われをあざむかざるなり、

六、禪尼面を燒く

新著聞集といふ漫筆に前話に似たる事をのせたれば、こゝに揭ぐ、古はかゝる類も少なからざりしにや、

むかし甲州塩山に法身和尚といふ高僧の妹なる禪尼ありける才智人にすぐれ節操たぐひなかりしかど、美貌のきこえ有て、世の誹避けがたしと、師の宣ひし事を聞きたまひて、鐵火を面にあて和歌を詠じて、

我が面恨みてやくぞしはのやま
　海士のたく火と人やみるらん
かくて師のもとへ至りけれバ歌道の奥義をあげて
こと〴〵く授け給へりとなり、

七、祇園梶女

梶女は、祇園林茶店の娘なり、幼時より怜悧にして、且つ文學を好みことに和歌を能くせり、當時梶女の名遠近に高く、時に貴人の歌會にも交はれりといふ、家集を梶の葉といひ、人の知るところなり、此女十四歳の時歳暮戀といふ題にて、
こひ〳〵て今年も仇にくれにけり
　なみだのこほりわすやとけなん
また立春の歌に、
のどけしな豊芦原のけさの春
　水のこゝろも風のすがたも
天然の詩才、人をして呆然たらしむ、詠歌のうち、霰の歌最も秀逸なり、
雪ならで梢にとめてあすも見ん
　夜半のあられの音のみぞして
一年、仙洞崩御の節、御いたみの歌とて上れる、
をよびなきお雲の上なるあはれさを
　雨かしたとてぬるゝそでかな
身を問へバ一茶店の卑女、意想を問へバ卓世の大文人なり、孰か驚嘆せざらん、

八、蓮月

蓮月は加茂季鷹の愛妾なり、季鷹没してのち歌道に心を寄せ、専ら風雅を事とせり、容姿きはめて艶美なりければ、他のと斯らいふを厭ひて、髮を

切り、齒を折りて、容貌を醜くし、もつて貞節を守れりといふ、詠歌數多あるうち「はしひめ」の歌もつとも人の稱するところなり、

はしひめの紅葉がさねやかりてまし
たび寢はさむし宇治のかはかぜ

女子の負ふべき大任（上）

大町芳衞

風俗、泥よりも濁り、人情、紙よりも薄く、百鬼公然、白晝に横行し、詭譎醜怪、聞くに忍びず、見るに忍びざる現在の狀態を慨きて、開闢以來、金甌無缺、天地正大の氣を鍾めて、臣民よく忠に、よく孝に、鞠躬盡瘁して、世々其美を濟したる既往の事蹟を說くも益なく、蹤を名利の塲に收め、心を閼伽の水に澄し、念佛三昧に安心立命の地を得て、以て未來の希望を托するも、唯一身の私に止つて、社會の公に及ばず。洵に既往の諫むべからざるを悟り、來者の追ふべきを知る。既往の事は一夢に歸しぬ。現在の事も亦止んぬ。獨り未來の社會の結果は、現在、心を用ゆる原因の如何にあらんとす。有識の士、往々悲慨の涙を呑んで、事に育英に從ふは、衷情、實に止むを得ざるものあれバなり。

春、种を下して、秋、實を收む。种、善ならば、實も亦善ならむ。種、惡ならば、實も亦惡ならむ。播种培養の勞ありて、然る後に、收穫の利を得べきなり。天保時代の敎育を受けたる人才、多くは明治の舞臺の立者たり。明治時代の敎育を受けた

るものは、將に未來の社會に向て驥足を伸さんとす。然らば則ち、望を未來の社會に屬せば、意を現在の教育に用ゐざるべからず。未來の社會の果實の善惡は、一に現在の教育の種子の善惡に由るなり。

知育に偏すべからざるを知りて體育をつとめ、體育と知育とを以て滿足すべきにあらざるを知りて、更に德育を奬勵するに至り、社會の教育、漸く完備せむとするに至りたれども、惜むらくは、演繹的の方法を取りて歸納的の方法を取らず、外に趨りて內を勉めず、德義の制裁、竟に死法空條に歸するに至れり。されど、口、道德を唱へて、不道不德の行をなすもの比々皆然らざるはなく、義を尙び、廉耻を重んずる風は、教育を受けたる紳士に存せずして、反て眼に一丁字なき傖人に存し、慧智、愈出で、大僞、愈起り、法令、益滋くして法網を潛る、道德上の罪人、益多く、佞諛輕佻の風、世に處する秘訣となりて、人心また得て收結すべからず。國家の元氣萎微して、世道日に傾く。教育の其當を得ざる、一に痛嘆に堪へざるなり。

人固より天賦の性質あり、然れども、教育により、經驗によりて、第二の天性生じ、二者融和混同して、以て其人となりを渾成するものなり。天賦のものは、人、これを如何ともするなし。第二の天性は、誘導の如何に由て變化せんとす。以て糸に比すべく、以て岐路に譬ふべし。而して之を誘導するものを大別すればニあり。曰く社會の教育、

曰く、家庭の敎育、是れなり。二者の偏廢すべからざることは固より言を待ざれども、社會の敎育は、學問技藝に其効多く、家庭の敎育は、志尙品行に其効多きを見る。近時、德育に注意せざるにあらず。然れども、家庭の敎育に於てせずして、社會の敎育に於てし、感情的に之を敎へずして、理屈的に之を敎ふ。其効果の少きは、また怪しむに足るものなきなり。

物、純白なるほど、感染し易きはなし。第二の天性は、最も多く家庭に嬉戲する時に成るなり。兒童が父母の膝邊に匍匐し、紅葉の如き手にて乳房を摑む時より、稍長して菓子を强請し、玩具を陳列して自から樂む時までは、其心玲瓏淸徹、未だ世の塵埃に汚れず、外界の刺擊深く其腦裏に貫徹して、牢としてまた拔くべからざるものあり。習、性となるは自然の理なり。先入、主となるも、亦怪しむべきにあらず。されば、此際の習、先入、即ち家庭の敎育ほど、大切にして且つ効果を奏し易きものはあらじ。孟母三遷の敎は更にも說かず。松下禪尼にして時頼あり、賢媼大婆公にして臺德公ありたるも偶然にはあらぬなり。

社會の敎育、固より必要なり。然れども、社會の敎育に於て、志尙品行を陶化し得べしと思ふは、誤れるの全く甚しき者と言はざるべからず。唯其れ心、淸し、故によく事に感ず、唯其れ心、虛し、故によく物を容る。人、成年に至れば、心、淸からず、また、虛ならず。自家の小理想、小智識は、往々師父老人の諄言を蔑視し、其面前にては謹聽

するも、退ては、則ち舌を吐くものあり。たとひ、北敎を奉ずるも、唯、外面形式的に之を奉じて、內心赤誠より之を奉ずるにあらず。百日の說法も、竟に、馬耳の念佛に歸して止む。危いかな。砂上に建たる家屋の宏壯なるも、一朝變あらむ、忽ち陷沒せんとす。抽象的、理屈的に勸化せられたる德義心の薄弱なるは、豈に止むを得んや。されば精神の勸化は、社會の敎育よりは、寧ろ家庭の敎育に重きを置かざるを得ず。而して女子は實に家庭敎育の主任者たり。故に吾人の女子に囑望する所以のもの、亦隨て大ならざるを得ざるなり。

井蛙小錄　井上頼文

二十六夜　太田南畝

あづまのみやこのならはしに、文月のはつかあまり六日の夜明の月のさしいづる光の中に、あみだほとけ、觀音せいしの三尊けさやかにをがまれさせ給ふとぞいふなる。その夜になれば、上中下老たるも若きも、宵よりいもねず、酒のみ物くひつつ、そのありあけをまちつくる事とはなりぬ。ゆいてや山のは、さはりなからん、月をまちつけんには、大城の南の海べなる九の品の上が上なる品川のほとりより、また夜をこむる深川のすさきはさらなり、あし引の山の手にしては、げにまもる飯田の町にさゝえとうでゝすゝめ、千早振神田のみやつこは、唯一の道をまもるときけど、ねぶつの聲の

いましめにもわするゝばかり、わきかへる湯島のうてなのあたりまで、東にたなびく雲のたえまよりもれいづる光をむかへて、手ごとにずゝおしすり南謨と、となふる聲、隅田川の浪にこたへ、むさし野の末にもみちぬらんかし。この頃、もろこし薛文清公とかいへる人のかきしふみを見侍しに、廿日あまり三日よりの夜ふかき時、有明の月のはじめていづるに、その光のあきらかなること、三日の月にまされるは、東に出る日の光の、西に入る日のかげより、はなはだしけれどなりといへり、さからぞ、二十六夜の月は、二十三四夜より日にちかく、初秋の空のすめるは、なべての時にゐまされゝむかや。その光のめもあやに、月のみふねのともへより中より光もかくやとめであへりしより、例の法の師のてだてに云ひもてはやせしをはて〳〵は、長き夜のさかもりを根ざしにて、あられぬみろかごとの、かたらひをもなせることぐさとはなりけらし。まよへば眼中に西施を見、さとれぞ心の外に別法なしと云ひけん、そのほとけをだにかたうどにして、わたくしの欲するかたにいひもてさはぐ、世のならはしこそ、おそろしけれ。

七夕

井蛙子

七月七日の夜、牽牛、織女の二星を祭る事は、漢土の俗にならひて、ふるくよりありし事ながら、其はじめたしかならず。天武天皇白鳳年中に、柿本人麿が棚機をよめる歌、萬葉集に見えたるかは

じめにて、つぎ〳〵にいと多かり。されバ、公事根原にも、天平勝寶七年にはじまるとも云るされしなるべし。昔は禁中にてもその事あり。まづ、藏人御調度を拂ひ拭ひ、夜に入て乞巧奠あり。清涼殿の庭に、朱漆の高机四脚をたて丶、黑漆の灯臺九本、おの〳〵灯あり。机の上に、色々の物をすゑ、箏のことをおき、火取に夜もすがら、そら薫物あり。盥に水を入れて、大空の星をうつし、琴柱のたてかた、秋の調にて、半呂半律の秘事などありしとかや。そのかみは、俗間にもそのほど〳〵に香花を備へ、供具をと丶のへ、庭上にふみをおき、さをのはしに、五色の糸をかけて、一事を祈るに、三年の中には必かなふなども、空たのめして、是を乞巧といひあへりしか、星移り年月かはり來ての世となりては、六日に市人が賣りありく、穀の葉をあがなひ、詩調をかきて、二星に備ふることとなりしが、また、うつりては、兒女どもが、五色の紙を剪り、短册とし、古歌をかき、笹の葉に結び、高く屋上に出す。これ、かの竹竿五綵糸にならへるものか。云かのみならず、さま〴〵の人形をはじめ、琴、三絃、西瓜などやうの菓物を、いづれも紙にて結びつけなどして、おのがし丶心たくみを競べるやうにもなり來りしが、もとより二星あひ逢ふといひはやせるが、大空言なりけれど、誠正しき近世となりては、おほやけより捨てさせ給ひ、下ざまにもや丶天の河をさへ打あふぐもの多からずなり來にたりき。

折々のいろ〳〵（二）

夏ノ始之衣色々

○藤重　白キ生ノ單　松重ノ表着
紅ノ小袿

○卯ノ花 表白ク裏青シ　白キ生ノ單　紅ノ表着
蒲萄染の小袿

此外の色々、先にしるすにおなじ、四月中は、袷の衣にて候、ひとへは衣更のひとへとて、精好のすゝし、いづれにもかさねをれ候、又、賀茂の祭の日は、すゝしの五きぬを用候、事も候、

五月五日より秋まできぬの色

○菖蒲ノ單重 表青シ裏紅梅　蘇芳ノ表着　二藍ノ小袿

○廬橘ノ單重 表クチハ裏青シ　白キ表着　蘇芳ノ小袿

瞿麥ノ單重 表紅梅裏青シ　蘇芳ノ表着　紅ノ小袿

○蘇芳ノ單重　女郎花ノ表着　二藍ノ小袿

○萩ノ經青ノ單重 スキ蘇芳タテ青裏青シ　蘇芳ノ表着
女郎花ノ小袿　萩ノ單重 表蘇芳裏青シ　女郎花ノ表着
紅ノ小袿

○女郎花ノ單重 表タテ青ヌキ黄裏青シ　紅ノ表着
赤色ノ小袿

○薄蘇芳ノ單重　濃キ蘇芳ノ表着　松重ノ小袿

○紅ノ單重　二藍ノ表着　朽葉ノ小袿

○二藍ノ單重　女郎花ノ表着　紅ノ小袿

○蒲萄染ノ單重　白キ表着　紅ノ小袿

○白キ單重　紅ノ表着　二藍ノ小袿

單かさね、上はすゝしの織物、あるひは、うすものゝ綾、下はわやのひとへ、ひねりかさ

ねにて候、下ざまは平絹薄物などを用ゆ、又あやを何色にても、そめてはりて用るなり、菖蒲立花は五月中、なでしこは六月まで、女郎花裁は祇園會より、秋のうちめさるべく候、表着小袖、皆すゞしおり物、或ふたへおり物をも上さまは用るなり、

九月九日よりきぬの色

○菊紅葉又何にても、五きぬ生にうすきわた入てもちゐ候に、ちか比はいかゞ候やらん、

十月より五節迄のきぬの色

是ハスハウ菊歟可尋

○菊ノ御衣ウヘ五スハウニホヒ下三シロシ　青キ單

黄青裏ノ表着 表黄 裏青シ　龍膽ノ小袖

○紅葉重八キイロ三山吹ウスキコキ一重紅ノウスキコキ一重スハウ一ツ合テ八ツナリ　紅ノ單

菊ノ表着　黄菊ノ小袖

○白菊表白裏蘇芳　紅ノ單　黄菊ノ表着

蘇芳ノ小袖

○黄菊表黄裏青シ　紅ノ單　白キ表着

蒲萄染ノ小袖

○移ロヒ菊表中紫裏青シ　紅ノ單　松重ノ表着

青キ小袖

○黄紅葉表黄色裏蘇芳　紅ノ單　蘇芳ノ表着

青キ小袖

○櫨紅葉表蘇芳裏黄　紅ノ單　蒲萄染ノ表着

蘇芳ノ小袖

○蝦手紅葉表薄青裏黄　蘇芳ノ單　紅ノ表着

蒲萄染ノ小袖

此外の色々は、先、春冬の色の所に記しをはりぬ、

一うちきぬの事

紅のおやそうちてかさねられ候、稚人は、こきうち也、夏冬にかゝはらず引刷らふときかさねられ候、常にはひとへはかりをかさぬるなり又ひとへにうちきぬをかさぬることもあり 小袿とは、紫のうちたるを言也、今の世にふじかねにてそむるはまねび物なり、

一單の事

夏は紅或はこき引べき也冬は何にてもひとへねりはる又ひとへかさねにひつべきかさぬることもあり

大概此分にて候大方は定まりたる事候はず候きぬの色によりてうはぎ小うちきは時により て御さたあるべく候みところ候はんやるがかんようにて候

此外又ものゝく晴の時もちゐ候裳唐衣にて小袿あるまじく候、

一裳唐衣は下仕もきるなり

一かさみの事

うはぎのうへにきるなり、童女のきるものなり、

一小袿の事

きぬの上に單、單の上にうちきぬ、うちきぬの上にうはぎ、うはぎの上に小袿、その上には袴をきるなり、ながき小袖ひとし中えうらあり、寸法は次第に上にきるは、そめらかすなり、

一皆練の事うすき紅のねりはりたるきぬなり

一細長の事欄のほそながにつまゝかなるかいれりうへて童殿上も細長をきるなり

皇太子幼童の時着す、白織物、言未通女のきるものなり、かりきぬのくびかみのやうにたて、、三はたゝりの物也、然れども可然人、若くは君たち女御參の時をとなしきも着用する也、組にて紐をつくるなり、

一熨料單の事　ことはりたるひさへきぬを云なり

一表袴の事

童女は晴の時は打袴をきるなり、袴のうへに表袴紋は、窠に霰をきるなり、くわにあらしよのづれはうへのはかまさきす源氏葵巻

一しひらたつ物

しひらはうは裳の事也、男ははかまのうへにきる、女はからもの上にきるなり、褶とかくなり、

一きぬのたけの事

八尺九寸也、それによりて、かつらのたけもながくするなり、

一袴紅の張袴、祝の時てきはりはかま、褻の時生の紅のはかま夏冬同じ、

冬は御の八領、或六領或五以下此うへに袴をきるなり、夏は單かさねの上にはかまを着す、近代は小袖を着用、但ひきつくらふ時、御ろを着す、物のぐは冬ひとへ、夏ひつへきうはぎ、裳唐衣、小腰ひきごし等、はれの時着す、

一主人はからぎぬ着せざる時てうちきをきるなり、からぎぬには小うちぎを着せざる事なり、

一主人のうはぎてうちきはかならずふたへ織物也、

一女房は、褻の時は、ひとへ、うはき紅のうちき、又、からきぬ等着して裳をきぬ例也、なは内々はうはぎひとへ、はりばかまを着せず、只衣の上にも唐衣を着する例なり、

一ひとへがさねは、すゝしの織物をも又綾をも何をもそめはりて、ひねりがさぬる也すはうはりをみなへしも常の事也、私には、平絹うす物なそこれを用ゐるなり、又、うはぎは織物なり、入内の時、女房、五節の童女等なり物を用る也内裏中下臈は、おり物わま等をきる也、

一打出には、かまを出すは不可然事也、

（をはり）

花菖蒲

千稲子

其十一

春は去り夏は來り、秋を送りて又冬を迎へ、同じく年は立返れど身は常に同じ身にはあらず。歳々日は明らかに照せど月は清澄なる光を送れど、照らさるゝ身は元の身にあらず。地上に引く影も憂に窶れていとゞ細し。

濃艶なる春の花開きて萬象は和風に浴するも、我身は獨り此恵に漏れて袖は絶間なき時雨のみぞ降りまさる。沫雪の中に香滾るゝ梅の花も、霞を染めて白雲群り掛る萬朶の櫻も、只徒らに物思ひの種とぞなる。夏にても又秋にても、同じく憂心を深き淵に誘ひ行くのみ。杜鵑一聲血に泣いて斷雲に入るの時、蟬聲涼風を呼びで森の梢に囂しき折、頸を垂れてうらぶれ居る身の頼みなさ。況して尾花の打靡きて蟋蟀の聲枯るゝ時、野分のおどろ／＼しく吹きて千艸萎れ伏すの折、思ひ無き身にも悲しき時期と知りぬるを、常に萬感胸中に壘まるゝ身には、轉々消ゑ行かんとする程心細さは重なり來る。

四時の變遷に心神を刺撃せられて忡々たる憂心に身を惱まされ、思を千里の外に馳せて悲しみを雨の袂に包み兼ね、辛苦の内に日を送りて只一度相逢ひて相語らんと願ひし折から、計らざる所に邂逅して心の喜びは盡し難きにつれ、先づ落つるは眞心より湧き出る涙にぞある。

知章は菖蒲の手を執りたるまゝ、滑り落つる恩愛の雨に暫く鎧の袖を振ふ。

相思ふの情相慕ふの心、艱苦に消えず辛苦も之を滅する事能はず、月と共に日と共

に増り行き、互に其面影を眸子に宿して忘るゝ時はなかりしものを、偶々此處に逢ひて笑つて語らんと欲すれど、あやにくに涙の爲に妨げらる。
知章は漸く顏を外向けつゝ天を仰ぎて長息せり。
かくてまづ口を開きて云ふ。
懷しかりしよ、菖蒲殿、長き年月南と北とに別れ別れて、雁の音信をも聞く時なく、如何にして暮し給ふらんと、戟を執りて敵に向ふ時さへ忘れざりしが、かく壯健に居給ひしは何よりも幸福にてありき。只悲しきは母上の無慘の御最期を遂げられたる事よ、聞けば我身の爲よりなりきとの事にて、一層身を切らるゝやうに覺え侍る。我數日前都に歸りて此有樣を聞き、憎しとも憎き振舞をなす奴哉と思へど、家の爲め浮と手出し爲す事も出來難く、胸を撫でゝ一日を過せば、うたてや今日の都落の議となり、心にはかゝるものゝ御身の事を尋ぬる日間もなく、思を殘して今落ち行く道なり、かくの如く偶然に相逢ふも天のまだ棄て給はぬにやあらん、夫に就け、是迄の事ども語りもし聞きもやせん思へども、早や夜も明け離れたれば、人の見る目も耻しく、平家の者は女の爲に心引れて都を落ち兼ぬるよと、京童の言艸とな

らば我身よりも一族の名折ともならん、かくては他の人々に對すべき面目もなし、かかる事はよく辨へたる御身なれど、名殘は盡きざれどこれにて別れん。くれ〴〵も身を愼み給へよ。我身は既に心を决したり、一度此地を去る上は平家の滅ぶべき時となりたり、豈に女々しく生を渝みて余命を繫がん、身は屍となりて水つくか朽むすか、何れにもせよ月日の光に晒され、せめては世の人に平家の族の快き覺悟を知らせんと思へり。されど再び御身に逢ふこと難らん、恐くは逢ふ事能はざるべし。思へど淺き緣にてありしも天の命なりと諦めん。若し我死したりとも速まりて身を損ひ給ふなよ。就きて我が一期の依賴あり、我母は今朝都を出る時、世を忍び給ん爲め、御身の住給ひし龜山の邊を目的として落ち行き給ひしが、賴み給ふ方もあらねば、如何に心細く思召すらんと、是のみ今は心にかゝれり、御身彼處へ至らば尋ねまつりて慰めまつりて給はれ、さすれば如何に喜び給はん。尙云ふ可き事は許多あれど、時を過して愈々人々に遲れたれば其の思はくも如何あらん、且つ父上も氣遣ひし給ふべければ。さらば菖蒲殿。謹みて壯健に暮し給はれ、是のみ我は祈り侍らん。

かく云ひて手綱を片手に執り、懐より唐錦の袋に包みたる短刀を執り出し、こは我が幼き時より身を放たず執佩きたるものなれバ御身に與へん、我とも見給はゞ嬉しからんと云ひ。ヒラリと駒に跨りて小手に涙を拂ひ落し、心弱しと自ら我を叱りて恩愛の覊絆を振り放ち、徐に駒の足掻を進めんとすれど、朝風冷やかに愁顔を撫でて額際に落つる黒髪は心と共に亂れ、桂川の水音身に染みて寒し。

菖蒲は青草の上に跪き、袖に面を包みて暫く涙に咽べバ、万感胸に浮び來りて絲の如く纏れに纏るゝ。

哀別離苦は世の常なりとは云へ、偶々相逢ひまつりて嬉しと思ふ間もなく、直に又涙を捧げて万里の長程に上り給ふを送る。實に伏と云ひ妻と呼ぶも只名のみ、聞く天の川原の浪際に立ちて、夜毎に彦神を待ち給ふ棚機姫も、秋風立たば必らず逢ひ給ふとか、今や生別はやがて死別となり、此現世に再び逢ひまつり難くば、我身は何として日を送らん、今日まで艱難を凌ぎ苦痛を忍びて死地を遁れ來りしも只逢ひまつりて相語らひまつるを樂しみと思ひしのみ、などてかく不幸の身にてもあるかなど、健氣なりとて流石に女の情の感深く、思ひすてんとすれど思ふに任せず、愈

愈く亂れに亂れ來て恰ど身は生きたる心地もなし。さは云へ、如何に悲嘆するとも今は詮なき事と强て心を勵まして、絶間なく溢れ來る涙を押拭ひ、與へられたる短刀を恭しく受けて懷に抱き、未だ沾みたる眸子に知章を見上げ、また堪へ兼ねて覺えず泣き沈む。やがて漸く思を飜して云ふやう、

かにかくと思ひ廻らして無益ざる事に不吉の涙を落し、君が出立ち給ふを妨げまつれり。女々しき事とさけずみ給はるな、宣ひし御言葉は一々承り侍れバ、謹みて淺はかなる振舞を致し侍らねど、御心安く御思召給はれかし。又母君の御事は君の御言葉なくとも、いかで愚に思ひ侍らん、我身に代へても慰めまつれバくれ〳〵も此事には御心遣なさせ給はるな、かゝる事を女の口より申上るは傍腹痛き事に侍れど、一時の勇の爲に代へ難き御身を過ち給ふ事なく、恙あらせず再び都の地に歸り給ふを神佛に祈りて待ち侍らん。都の地に遠きおどろ艸蒸す片田舍は起臥も御心に任せ給はざらめど、時々の移り變り寒さ暑さにも御身を謹しませ給はれ、東の方に坐すと聞かむ日の出る方に向つて君を思ひ侍らん、西の土地に戰わりと聞かむ月の入る方に君はいますと思はん、燕の往返り雁音の聲を聞き給はゞ、只一度の音信

れを忘れ給はるな。
聲をも身をも震はして、潸然として又暫し血涙を絞りぬ。紅梅雨に沾れて露滴らんとす。

かくて悵然として面を擧げ、餘りに時を過し給ひて先きの方々も訝り給はん、申すべき事は山なせど、留まり給ふべき時にあらねば、妾も心を決して別れまつらん。只一言申上げたきは、彼の母を討ちたりし靑山綱範は、昨夜闇に紛れて首搔き斬り侍りしかば、御心安く思し召し給はれや。

涙を見せまじと齒を嚙みしめて差俯けど、黒き髮の毛は漣々として震慄す、知章は愕然として打驚き、手綱を引緊めて暫く嗟嘆しつ。さても健氣なる御身の振舞哉。兜鎧に身を堅めたる武士もいかで及ぶべき、かゝる氣象ある上は我も心安く思ひ侍らん、名殘は盡きざれど菖蒲殿、いざさらば我は行くべし。身を恙なく保ち給へよ。一鞭高く鳴れど馬の跡は松の木間を縫ふて鎧の音戛々として鳴る。殘るは數點の涙の露のみ。

文林

池上月　近衛忠凞

池水にふねをうかべてさすさほの
しづくにちらす月のかげかな

秋田風　東久世通禧

千町田の稲葉をわたるあきかぜの
はげしき音もきかぬとしかな

松上秋風　鍋島直大

もみぢ葉の吹く秋風にちるなべに
松のみどりぞいろまさりける

籬下虫　前田利嗣

ひろからぬ籬のもとにさまぐの
虫の音絶えぬあきの夜はかな

巖苔　高崎正風

千よへたるまつの雫やそめつらん
いはほの苔のふかみどりなる

短夜月　諏訪忠元

あかなくにあけはなれゆく短夜の
月のひかりをしばしとはみる

水邊女郎花　宮地巖夫

川きしに咲てにほへるをみなへし
水のこゝろになびきかはなる

雨夜萩　坂正臣

眞萩原ふけておとさふむらさめに
わしたのつゆを思ひこそやれ

籬外虫　小出粲

おり立は垣のとにてそおりにけれ
庭にきこえしすゞむしのこゑ

虫聲幽　谷勤

萩の葉のそよぐ音よもまぎれけり
かしましと泣きゝしむしのね

行路霧　內藤存守

人影はきりにかくれて見えねども
道のゆくてにこゑぞきこゆる

晴夜月　大口鯛二

廣庭のまさごにうつるまつかげの
暗きはつきのわかきなりけり

秋　西川須賀雄

小男鹿の鳴きて別れしあとならん
朝つゆしげきはぎのはなづま

深夜の虫　糸山貞幹

よもすがらなきし泪にしづむらん
かすかになりぬ鈴むしのこゑ

代々木の里にいへゐうつして　林甕臣

とぢはてし葎がかども住みすてゝ
つひに山にはいりにけるかな

喚子鳥木ふかきまつのかぜのほか
人おともせず代々むたのさと

殘暑　石丸忠胤

秋ながら土さくるまでてらす日に
忍びかねてやひぐらしのなく

紀貫之朝臣　三浦千春

むかしよりくむ人たえてなかり鳬
紀の川みづのふかきこゝろを

萩風　柴田　顕光

あはれわが今宵の夢やいかならん
軒端のはぎに風たちぬなり

明石くに子

秋はぎの花かぐはしきすがたより
まれなるこゝろあふがざらめや

佐々　豊水

鴨川　草野　隆道

西山に月はかくれてかつらがは
たかせ早くもさすらふねかな

故郷撫子　篠原　政禎

をしへだにする人もなき故郷の
庭のなでし子いかに咲くらん

水雞　千日　亮

明かたの月をのきにやさそひけむ
きらみしまぞにくひな鳴なり

野草帶露　鍋島　榮子

夕月のかげをふみつゝきてみれば
花野はつゆもさかりなりけり

夕鳩　前田　朗子

打むれてねぐらに今ぞかへるらん
軒さわがしきいへばとのこゑ

閑居水聲　松平　健子

わが庵の垣ねをめぐるみづの音に
こゝろの塵もあらひてぞすむ

田上雁　鳥尾　廣子

遠方はきりにこもりてくれわたる

田面さやかにおつるかりがね

遠山鹿　小笠原艶子

遠山のしかのねたかくきこゆなり
更えづまりし夜はのまくらよ

峯鹿　鶴　久子

夜もすがら妻とひわびて横くもの
わかるゝ峯にしかのなくらん

秋興　服部磯子

新しぼりくみて歌ひてあそぶまに
いつしか秋の日はかたふきぬ

筏　保科節子

桂川はあさぎりふかくたちこめつ
いかだの棹のさしまとふらん

夏夢　諏訪晴子

おちたぎつ瀧をまくらの夢なれや
さめての後もすゞしかりけり

草花先秋　安東菊子

うち日さす都のいちはなつながら
秋のちくさのはなもうるかな

松尾たせ子刀自の世をさり給へることをかなしみて　阿部優子

萬代にくちぬみさをを留めおきて
ゆきにし人のをしくもある哉

夏月浮水　尾崎すゞ子

月と共にわがさす舟もうけて見む
瀬の戸は涼しかげはさやけし

祇王前　海上壽子

露ふかき嵯峨野の奥のをみなへし

うきよの秋をはやく去りけむ

廢邸萩　　鹽井　長子

あるじなき庭にもいつか咲初めて
ひとり露けきはぎのはなかな

こたび宣戰のみことのりをかしこみて　　河野　文子

千萬のあだもなにかはいやたかき
君のみいづのあらんかぎりは

不忍の池乃蓮を見る記

諏訪　忠元

近きわたりに住みながら、不忍の池の蓮、心靜にたちよりてみし事もあらねは、今年こそ、ものすへけれと、兼てより思ひしに、十八日の夕へ、例のゆあみなとなしはてゝ、はしちかく月に向ひて、家の人〲と物語なしつるをりしも、ふと蓮のことに及びて、あすはまたきよりものせんと、互にかたりあひつゝ、ふしとにつきぬ。いとかしかましき音に、夢もやぶれて、おきいづれバ、家のものゝ、雨戸をあくるおとにぞありける。光くまなき月の、曉のそらにすめるをみて、

とくおきしかひしもありて有明の
くもゝかゝらぬつきをみしかな

かく心におもふまもいそぎつゝ、例の事ともなしおへて、四時すぎて、家をいでぬ、上野にかゝりし頃、朝顏の花見にものしたる人にあひけれど、かくなん、

朝顏もあはれと思へど今朝はまつ

きよきはちすのはなをみてこん

と、ひとりごちつゝ、あゆむまに、彼方につきぬ。やをら見渡せば、蓮の花一面にさきひろごりたるに、ふりはへこしかひもありけれど、

たづねこしかひも有哉ひろごりて
いけせまきまではちすはなさく

と、口ずさみしに、つれなる晴子、

しのばずの池ははちすに埋もれて
きよくもさけるはなのいろかな

と、いへるも、折にあひてをかし。また、其花のきよきをめでゝ、父君のよみたまへる、

世のちりもけふはわすれて不忍の
いけのはちすのはなをみるかな

とのたまひしも、まことにさる事なり。さるに、たちこむる狭霧に、向ひのきしのみえ分ぬに、常よりも池の廣くなりたらんこゝちしけれど、

不忍のいけのおもてもけさみれば
たつやさぎりにひろくなりぬる

と、心の中に思ひしに、晴子、

たちこむるさぎりに今朝は不忍の
いけのはてさへみえわかぬなり

かく心の打合ひしも、おのづからのわざになん。とかくする程に、さばかりのきりも、いつしかはれ渡りて、打向ふ心さへすが〳〵しく成りぬるに、朝日のまだゆく、花の上にさしけれど、

立こめし池のさぎりははれのきて
はなにまだゆくあさひさすなり

其池水の濁にそまぬをめでゝ、父君、

池水のにごりにそまぬはなも葉も
　　きよくすゞしきはすのいろかな

尙、此方かなたを見るに、橋の左の方は、紅の花右は白きかさきつらなれるむかし。源平二氏の對陣も、かくやと、其世のことぞうちしのばるゝ、さるに、又、紅白の花の交りて、さけるをみれば、二氏の旗立てゝ、打みだれつゝたゝかひしも、かくやと思ひよそへられてなん。

たゝかひし屋島の浦のふることを
　　はちすのうへによろへてぞ見る

かく口ずさみつゝながむる程に、やう〳〵朝日のくまなくてらし來ぬれば、今はとて家路につきぬ。

濁りなきはちすの花を見てかへる
　　こゝろのうちぞよにざりける

雜報

●滿宮殿下の御薨御　掛まくも畏き我が　大王の皇子輝仁親王殿下には昨年十一月三十日に、御降誕あらせ給ひてより、御機嫌、殊に、麗しく生ひ立たせ給ひしに、この夏になりてより、御氣色勝れさせ給はず、箱根宮の下に御駕を駐めさせ、暑を避け給ひしに、過ぐる日の氣候の變にて御惱の腦膜炎は變りて腦の痲痺を催ふし來りし由、聞えければ、侍醫の人々、急ぎ馳せ參りしも、御容體

日にく〱重らせ給ふのみなれバ、早く御歸京あらせらるゝに如かじとて、去る十七日、午前零時三十五分に還御あらせられ、麻布市兵衛町の御殿にて、御療養を盡くされしも、其の御甲斐なく、同三時十分、終に、御薨去あらせ給ひぬ。かくて、二十一日午前、豊島岡御墓地に於いて、御葬祭の御式ありたり。綾に畏くも、九重の雲井遥かに、久方の天神の御裔と生れ給ひし、高照吾日の御子の、僅に、十月を一期として神避坐してとの悔きは、天か下、擧りて、濡ぬ袂もなく、殊に、畏き御あたりの御心を仰ぎ奉つりては、更に、言ひ出でん言の葉もなき事にこそ。

●貧民女學校　は、大日本婦人教育會長毛利公爵夫人、幹事小鹿島筆子、添田夫人などが、皇后宮の令旨を奉じて、創立したるものにて、此頃、追々、貧民の兒女の入學するもの増加して、隆盛に赴くを以て、今後は、更に、之を擴張して、府下各區に、一校を設けんとの計畫中なりといふ。吾人は、深く、其の實行あらんことを望む。

●倚松園女塾　とは、園輝子ぬしのこたび新に創むる所にて、去る十八年以來、歐米各洲を歴遊し、海外女子教育の有様を觀て、大に啓發する所ありて、昨年歸朝の後、其の志を達せんと遂に府下麻布區仲の町に、この塾を設けて女子に必要なる學科を授け、専ら、實用を務めしめんとの希望なりといふ。あはれ、この塾にして、眞正の教育を施して、完全なる婦女子を養成せんこと、吾人の、最も、願ふ所なり。

●小學校裁縫科の改良方法　に就きて、香川縣教育會、寒川分會の調査案なりとはいふを聞くに、左の如し。

第一、教員　(一)裁縫教員は可成正當の資格を有し且技藝學力の優等なるものを撰任する事(二)師範學校女子部卒業生及其他本科正教員の資格を有する女教員を任用せる小學校に於ては必ず之をして裁縫科を受持たしむる事(三)自今師範學校女子部に於ては一層裁縫に重きを置きて生徒を養成し又檢定試驗に於ても可成此の科の程度を高められんことを希望すること(四)小學校長は此科の教授法等を研究し且一層其監督を嚴にすべきこと

第二、教授細目　各小學校の裁縫科教授細目を一定し且嚴に之れを實行すること

第三、裁縫の材料　各小學校に於ては裁縫の材料を備置きて之れを兒童に貸與するの方法を設け以て同時に同物を教授するの方法を嚴にすること

第四、教授時間　成規の許す限りは可成多くの時間を裁縫に配當すること

第五、教授法　(一)裁縫科教授上の參考となるべき良書を撰定し各學校の教授法を改良統一すること(二)裁縫科教授の改良を圖るため講習若くは研究會を開くこと

●仁川の有志婦人奮て看護婦となる　朝鮮仁川に在留する吾が婦人等は、假令、開戰の曉となるも、妾等は、歸國せず、飽まで當港に踏止まり、相當の事業に從ひ、聊か國恩に報いんものと誓ひしが、今聞く處に依れば、其の有志の婦人は連署して、同地野戰病院に在る軍人の看護に從はんことを願ひ出でたりとぞ。亦、嘉すべく稱すべき事にこそ。

●福羽子爵の演説　左に掲くるは、本年六月廿三日、女子高等師範學校に於いて同子爵の講話せられたるものなり。今、其の筆記を得たれば、偏く諸君に頒けまゐらせん。

女德の順序

今日は當席に出て何かお話を致すやうにと、校長よりお話もござりましたから、出席致しましたが、全體はや老人になつて、餘り他の席へも出ませぬ位のことでござりますけれども、當校は以前の緣故もあり、旁々で校中拜見にも出たいと兼て考へましたが、其果しも宜う致さぬで居りましたが、幸に今日一席のお話を致し、諸君の景況を一覽致しまして、學校の追々盛大になる斯の如き有樣を見て歸るのを滿悦と考へます。何は及ばずながら有益のお話も致したいと考へますが、餘り長く務むることも出來ませぬから、あれこれ取摘んでお話を致します。

先づ當校へ對する所は、聽衆皆女儀の方であれば、女儀の德を養はるゝことゝ考へまする。それ故に、それに關係したることを少しばかり述べやうと考へます。併ながら又考へますれば、當校のお方は他へ往つて、皆人に敎授せらるゝ人とならるべき資格を養はるゝ所の人であれば、他へ向つて人の敎育を說かるゝ所のこともあり、且つ一身上のことに取つても、男子の爲すべきことは、斯くあるべきものであると云ふことゝ、尙男女混一なる人の德義は各ゝ具へられて、然る上に女子の德をも具へられねばならぬと

考へますれバ、一應男子女子の分別のない所の養ひ方の意見を述べ、且つ續いて、當校修業の上、他の學校に聘せられて教育を實施せられまする上にも、聊益のあるやうにとも考へますれど、總體の男女共にせねバならぬことゝ、又男子たるものゝ重もに磨く道理とを併せて一應は述べますから、其積りで御承知になりたい、それよりは段を切つて、尙申す所に至つては、重もに女子の德に關係することを述べやうと考へます。其述べやうと考へまする順序は、凡そ先づ斯の如き順序でありますのでござります。

先づ女の德を養ひまするは甚だ大切なことであつて、實は能く勘考せねバ難いことのある場合でありますから、大凡の順序を立てずに、唯ゝ女德々々と申しても漠然たる有樣であるから、一つ順序を立てゝと考へまする故に、先づ凡そ五段に切ります。五段に切ると申せど、即ち先づ一段は、先入と云ふものがあつて、腦髓へ初め這入つたことは、生涯離れられない道理のあることであるから、先入のことを能く辨へて、成るだけ益德のあることを、先入にせねバならぬと云ふことに、注意を加へねどならぬから、其道理を、先づ先入の道理と申せど宜からうと考へまして、此一つを述べ。續いて言語動作と申して、人と云ふものは、人と交を結び、一身の德をも得、身の立つ所は人と交らねどならぬ道理であれバ、必ず言語と云ふものと、動作と云ふものは離れぬものであつて、此事は善にもな

り、惡にもなることで、人の德儀に關係致しますから、言語動作と云ふ一節を述べ。それから致しまして、是はマー年の幼年、若年、老年までも思はねばならぬことは、人の勤勉――人のつとめはげまねばならぬことで、其勤め勵む場合には、必ず大なることもあり、小なることもある。或は一家を持つときには、小なることより大なることに及ぼして、德を全うせねばならぬから、先づ小大の勤勉と云ふ節を述べませう。それから各々一家を持つて人の道を全くせねばならぬ道理であるから、一家の整理と云ふことを述べまして、而して後に彼の家を持つ上に於ては、其家に主たる所の夫妻は勿論のこと、長者あれも長者、幼者あれも幼者、長幼に對する所の、皆和合のことがなくしては家は全からぬものである。其和合と云ふことに幾重も順序があつて、唯々和合々々と云ふて、其當座和合して居る場合もあれども、不期なる和合をはげむ場合もあれば、其德ある和合をはげむときは、一家繁昌の基となり、其一家の和合は一村の規模ともなり、一村の和合が、又積つては遂に一國の榮譽ともなる。それが及んで、子々孫々の和合力にもなることがある。其和合の力と云ふものは、實に宏大なるものであつて、ナカ〳〵容易ならぬ所の道理であるから、力ある和合の道理を一言述べやうと存じます。マー斯う云ふ順序としてお聽取になるやうにありたう存じます。

扨てさう致しますと、先づ右男女に拘はらぬ德

ですが、一體人の徳と云ふ所のものは、其力にも男子ばかり重もにはげむべきことがござりますけれども、其はげむべき道理は、女儀に對する此席ではありながら、其總體のことを一言述べますが、全體人の徳と申すものは、是まで各從事なさる所の徳と、或は教員の涵養に遇ふてお辨へのことではあらうと存じますけれども、先づ思ふ所を一應述べますれど、人たるもの丶徳と申すものは、是はナカ／＼輕からぬものと申すことは、誰も申す通りのことでござります。行を慎み、其身を全うして、遂に其國の品格の上下にも關係致す譯であれど、人たるもの丶慎むべき、勤むべき、あるべきことゝは、是は萬々知られましたる通りであります。併ながら此廣き

所の、大なる所のことを、此一席で、殊に又小切つて一席として述べやうとすれば、限りもないことでありますが、美靜が豫て思ふ所を人にも告げましたから、取摘んで其前きに述べますれど、斯の如き明治の政體、王政復古してからに、萬民其宜しきを得る時節到來して居ることでござりますけれども、惜いかな人間の度と云ふものは、急に進歩しやうと思ふても爲し難いものであつて、王政よ復すると云ふことは、政事上より關係し、一國の大事であつて、容易ならぬことであつたのを、それ／＼の有志者もありまして急いだが故に、先づ／＼王政の復古と云ふ大事は成りましたですが、其王政に適當したる所の人と云ふものは 急に作り難く、得難

いものである。是非此王政に適當致した人間が此國に充滿して、遂に其王政の德の完きを得る所のものであつて、人々其德を完うし、天下王政の幸を享くるやうにならねばならぬ道理である。併ながら王政に向つて、今日の人は未だ十分の人でないと、失敬ながら私は考へます。甚だ申し惡いことであるけれども、若し茲に力を盡さんと欲する所の人があれど、我輩は相共に爲したいと思ふ所のことがあるのは、我輩の若きときは、王政の復古のみを急ぎましたが、今日は其事はなつて喜ばしきながら、又今日王政に適當の人を得ないのは嘆ずべきことである。之を如何にかして、王政に適當の人間を得なければ、實に居られぬやうじやと晝夜痛んで考へて居りますのであります。どうぞ之をして、天下公衆の中より、あれこれの盡力があるやうにと考へます。それ故に先づ有難い所のことは、彼の勅書も出されまして、敎育の道に大なる幸を御下しになつて、其勅書を拜讀し、心に感じて、先づ其基として數多の敎員も盡力され、衆人是に感ずる場合には成行きましたが、唯、併し惜いことには、其勅書は仰いで仰ぐべき人の德たる忠孝の道をはげめ、德義を養へと御沙汰のあることであるのに、どの敎育書にも、追々手を出して見ますると、唯勅書の大なるを有難がるばかりであつて、其勅書中にある忠の道は斯く斯くのものである。孝の道は斯く〳〵のものである。德と云ふものは斯く〳〵であると云ふて

その、其小割を說いてあるのは、實に乏しいのである。其乏しい所のものは、實に由來あつて、一朝一夕に變更することは出來ぬから、其敎と云ふものは學者に從はねバならぬが、其學者と云ふものは、或は文化、文政、天保時代から成立つたる人が多いから、大變古い德川時代に涵養せられた德義より外は持ちませぬ。偶々歐羅巴あたりの文明の國に從つて、文明の學者に大事業を見習つて來たり致して、知らず識らず自然の德義の宜しきに趣いて居る人もありながら、其德と云ひ、天然の敎育の涵養を享けた所の有樣は、文化、文政の時代のものが多い。故に誤が多いと云ふて宜しい。其誤を一二茲に喚出して　お話を致したならば、推して他のことはお考あつ

て宜しいと存じます。其誤と云ふものを先づ一二述べますれば、勅書に忠をはげめ、孝をはげめと云ふことがある。其適例を引いて言はねば人は心に感ずることはありませぬ。其心に感じさせるやうに致さねばならぬのに、彼の敎科書は文部で許を出して居ると考へますけれども、それは妨のない、害の少ない　を許してあるので、決して結構と思ふて許してあるのではないと思ふ。故にまだ〳〵結構なものとは言はれぬのみならず、我輩の考には、或は害を爲さうと思ふものも、中にはあるでござります。と申すのは、先づ手近いことを言へバ、孝行でござります。親に孝をすると云ふ所の孝の道理は、親の喜ぶやうに致して、親に滿足を致さしめる樣にせ

ねばならぬ。其滿足を得せしむるには、一朝一夕のことでは參らぬ。骨を折り修業を致して、親に滿足——喜を爲さしめるやうにせねばならぬである。併ながら天保時代迄の所と今日の所と、どれ丈け違はねばならぬかと云ふことを考へねばならぬ。德川が泰平を保つた所以と云ふものは、唯々巳れ取つて以て天下を治むる道理であるから、己れより強きものを出さぬやうにせねば天下は治まらぬから、己れより弱き者を出して泰平を裝はねばなりませぬ。是は無理ならぬことで、德川時分の政治は思慮あつてしたのである。併ながら是は第二の思慮で、第一の日本の人民に在るべき思慮から言へば、尊むべき天子を尊み、天子の大事となさる所の人民を、又大事とせねばならぬ。それは先づ天子は暫く政治に御關係のないやうにして、己れ先づ干戈の亂を治めて、而して人を教ふるには、どうしたら宜からうかと言へば、先づ餘り爭はないやうにせねばならぬから致して、成る丈け穩になるやうにと致して、突出した人のないやうにせねばならぬ。學者も其都合に拵へて、世の中の風俗を優美にして治め來つたのが、三百有餘年である。如何にも其時はさうなくてはならぬが、惜いかな、第一の朝廷をあとにして人民を育てたから、人民の度が低いのである。低く養はれた人民であるから度の低いのも當り前のことである。併ながら斯く王政になつて考へれば、實に殘念の次第であつて、一面には人の智慧を增すことをさせなん

たが故に、人の度量が少なくなつた。一方は文明國で文明を急ぎて行くに こちらは唯々穴の中より四方を見ずに居つたと云ふやうな有様であつたから、甚た手後れになつたと云ふやうなことで、實に殘念の感じがある。之を王政の民として、今日思返へして考へれば、われは誤であつて、今日は王政の民であるから、王政の民に適當の者にせねばならぬと、茲にお考が付かねばならぬ。其中古の先づ手近い所で申せば、大古は格別、中古では決してそれを敎へないではない。敎へは致しましたけれども、書物の讀様を小さくして敎へましたが故に、皆さん御承知の通り、先づ孝經を讀んだ方は御承知でもござりませうが、身體髮膚受之父母不敢毀傷孝之始也と云ふてとがあつて、孝行と云ふことは、身を全うして傷けてはならぬ。身體髮膚に毀ひをしてはならぬと云ふことを、手近う敎へてあるのは、誠に宜い敎と言はねばならぬ。併し其末の文言には、立身行道揚名於後世以顯父母孝之終也と大孝を示してあるが、其初めの所を說いて、大孝の正しきことを敎へずに置いた。斯くして置かねばならぬ。身を立て名を後世に揚ぐる樣な人がボツ〳〵世間に出て御覽なさい、所謂己れより低き者を出すと云ふ政略には背いた世の中になつて、トン〳〵身を立て道を行ふことが出來た時には、天下は先づ治まるまいと考へまして、武家では此事は唯々讀んで字を知つて居る位にして置け、其意味合は深く說かぬ方が宜し

いと云ふ樣なことであるから、儒者も委しう言はずに置いた位でござりました、併し是は隨分大事な敎方でござりますから、我輩實に感じて居つた。實は斯く申せバ、申過ぎるやうでござりますけれども、我身は元と田舍の一人であつて、どうかして人の爲すべきことをして見て、德と申す程のことは有せずとも、何か爲さねバならぬと考へたのも、其書物の敎へ方を深くせなんだからでござりませうが、初も終も一樣に考へて讀んだ、前の身體髮膚受之父母不敢毀傷孝之始也、是も終のも一樣に重いと考へて讀んだのでござります。して見れば、立身行道揚名於後世と云ふことは、身體髮膚受之父母不敢毀傷と云ふことより、後との方にはなるまいと考へますことでござります。そんなことからして、みづからも世の中に顔を出しましたのであるが、いま王政には復古しましたけれどもが、敎方は文化文政の敎方に似寄つたので、先づ第一に身を立て道を行ふことを敎へねばならぬことであつて、身體髮膚受之父母不敢毀傷の方は、後と回しとなして宜しい。それ故にどの敎科書も――我輩も博覧でもござりませぬが――我輩の見る所のものは、今の敎科書は善くないと考へます。或る敎科書に屬して居るものは、繪で書いてあるものがある。それは子供に皆繪を見せて、早く分るやうにしてあるものでありますけれども、繪で書いてあるものは孝行と云へば、先づ貧しき人が食物を得たれバ

先づ親に進めやうとしたり、或は親の病氣が治らぬながら、看病を能くして養ふて進せたり、其人に力がないものであるから、其身を人に雇はれて親の孝養を懇切に致したりするのは、是も惡いとは申しませぬが、願くは身を立て道を行ふと云ふことを主として、其餘波が貧しき人にても斯くせねばならぬことゝ敎へねばならぬことゝ考へます。それ故に孝行の掛圖であると、孝心を繪で起さしむるのは、孝行の方にかいてござりますけれども、申さばあれは一方を見せて、一方を見せないやうのことでござります。それが初めを立身行道揚名於後世と云ふことゝにして、男子は世の中に顏を出してから世の中の者に仰がれて、種々の人の尊い所へ昇つた

る所の威服敬恭をして、老人の夫婦の親に見せしめたならば、其親は誠に我子を見て涙を流して喜ぶと云ふやうな景況をかいたならば何如でござりませうか、嗚呼子と云ふものは持つべきものであると云ふて喜べば、其親の喜は重疊でござりませう、其喜ばしきことの重疊なる所を繪にもかいて見せて、若し斯の如き人の出來ないときには、兩親を懇切に養はねばならぬと心付けねばならぬ。昔の二十四孝のことなどを引いて書いたのもありますけれども、多くは奇なことを述べて、難いことを書かずに奇なことを先きにすると云ふのは、マダ敎科書の全きものでないと考へます。先づあれを敎科書として居る間は、人にも勸めねばならぬものであるから

致方もあるまいが、どうぞ諸君は、人に教育を爲すことがあるか、或は保護者となつて教養せねばならぬ有樣があるのでありますから、どうぞ其砌は、全い孝行の大なる所を先きに敎へ、小なる所に及ぼして敎ふるやうにするのが宜しいと思ひます。斯の如く維新前と維新後とは、人の作りやうが違つて居るやうであるが、忠の敎方も左樣である。主人と賴む人に力を盡して身命を擲つのは、忠には違ひないのでござりますが、あの世の中は、一天の主人たる所の天子を、あれどもなきが如くにして置いて、己れ打勝つて大將軍となり、大小の國主とも成たのであるから、其臣下たる約束をした者が、己に盡のを忠義じやと斯う敎て、一天萬乘の君に盡と云ふことを除けて居たのである。又國に盡す忠義と云ふことをも除けてある。唯〻其時の將軍に盡すのが忠義である。主人と賴んだ所のものに盡すのが、忠義であると云ふやうに敎へてあるけれども、維新以後は此事は大に變せねばならぬ道理があつて、是は我輩述べずとも、諸君はお分りになつて居ることである。成程忠臣藏の大石始め、あの時賴んだ所の主人に身命を擲つたのであるから忠臣で、如何にも宜しいけれども、それはあの時代の忠臣である。あの時代の忠を、決して誹ることも、笑ふこともならぬ。如何にもあの時代には、あの人達は善くしたのであると、實に感せねばならぬが、扨て其時を維新以後に考へ合せて見れば、維新後は大名はないやうにな

り、其主人と云ふものは契約上の主人であつて眞に我身の主人と云ふものは、一天萬乘の君である。　天皇陛下であると斯う考へまして、陛下の爲めには、どうしたら忠義が盡されるであらうか、日本の爲めには、どうしたら忠義が盡されるであらうか、と云ふことを勘考せねばならぬ、――勘考して御覽なさい、追て分らうとは考へますけれども、或は氣が短いで………どうぞ早く其維新のことに應ずる忠孝があつたいと思ひましたから、折々人にも述べましたが、先づ忠の道も廣い譯であつて、變のあるとき忠の道を盡すのは、命を盡し、身を盡して爲すは、是は當然のことである。其當然のことが爲し難いが、昔から是は當然のことで、國民たるものは然かなければならぬことである。然らば其變のある時まで待つては忠を盡すことはないから、今日居ながら忠を盡さねばならぬ道理である。親に孝を盡すと同じ道理である。今日斯の如く泰平の德を身に浴しながら、忠を盡さないで宜しいと云ふことはない。どうしても忠を盡さねばならぬ。これは取も直さず、我邦の大になると云ふことを希望し、他の國より劣等國と言はれないやうにせねばならぬ。如何にも人の度と云ふものは上には上があることで、急には出來難いものであるけれども、此儘で居つて宜いと云ふことを止めねばならぬ此事を一寸でも忘れぬが、忠の一番人の足の寄せやうである。今日此儘で居つては日本と云ふものは濟ま

ぬ。日本の國と云ふものは、此儘の大きさで居つて濟ます、此儘の德を以て濟むとは言はれぬ。其上の國に優つて、人に優等と言はれねバ、此國の天子を高めることは出來ませぬから、我一天萬乘の天子をも高むるやうに、度の高い所の良心を人に持たせねもならぬ。是が忠に一歩一歩足を寄せるのである。其業はどうするのかと言へバ、各〻一家の度を高くして、其一家の度が積つて、國の度が進むのであるから、度の高まるやうに業を勵まねバならぬ。商業にもせよ、工業にもせよ、農業にもせよ、學術にもせよ、各〻違ひますけれども、爲さうとする目的は、此國の度を高うすることを考へねバならぬので、此國の度を高うする責を持つて居る人であれバ、租稅、工業から出す稅、商業から出す稅、其他諸多の稅を拂ふて、此國の歳入を增し、事業を多くして、此國は他の國より大國と稱せられるやうに爲さうとするのが、則ち忠義である。それで、若し一朝艱難の世に及んだならバ、各〻身體を盡して行くのが當然のことであつて、平日爲した德の餘波が玆に及ぶのである。即ち此邦の度を高くせねバならぬと云ふのが忠であるので、是は男子も女子も一同に考へねバならぬことである、男子たる所のものは外に出て働くから、或は忠を盡す人は男子に多いと思ふかも知れませぬけれども、決してさうではない。女子もやはり其心で各〻子弟を敎へ育て夫婦家を持つて、女子は内に在つて子弟を敎へたり、家

の事をするから、男子が外に出で物事に從事するときは、男子の力一杯爲すことが出來るやうになる。それをするには、家を守る所の配偶者がせねばならぬのであつて、各〻忠は離れられぬものである。斯の如く致して論ずるときは、維新以前の忠孝と、維新以後の忠孝とは、大に變つて居るものであるから、掛圖にもせよ、人の家を評するにもせよ、あの意はあると云ふことを考へねばならぬ。古書を讀んで孝とあるのは、其時代の孝であるから、其時代の總體を見て勘辨を付けて、古は愚な忠孝をしたなど〻言はぬが宜しい。是は其時代に敎へた忠孝をしたのであるから、別に今日は、今日の時代に合せて、斯の如くせねばならぬと云ふ忠孝を考へねばならぬのが道理であらうと考へます。而して人に交る上に於ても、此日本の一小國である。其一小國を封建時代には幾つにも分割して、交を狹くして治めて居つたのであるが、それは一種の方畧であるから、其時はそれで宜しいが、今日は世界萬國につきあふて、此國の美を現はし、此邦の交際を廣くせねばならぬ。交際を廣くする世の中に生れては、又他國の人の德義と云ふものを見出して、己れの心にも感じ、人のする所をもこちらから評してゆかねばならぬことであるからして、吾が德が小さければ、人の德を評することもちさい。吾が德が大なれば、人の德を評することも必ず大になる。其德と云ふものは、一々述べたならば、是は限りもないこと

であるけれども、男子には男子の徳があり、女子には女子の徳があり各々其徳がありて、是は後に述べる順の立つたお話にも關係致しますが、さう致しまして、忠孝徳義と云ふものは、男女の別もなく、又大なる所の今日の世の中に應ずる研究をせねばならぬと云ふことの一を、先づお話をするのは斯の如し、

●年迺舍　七月兼題（前號のつゞき）

夕立のあめまたれけりみなつきの　南部　明子
てるひの岡のゆきかひにだに

みるがうちにそらかきくもり夕立に　増山三雪子
ぬれながらゆくかさとりの山

ときのまに雲たちおほひ山のなの　大岡　操子
をくらくなりて夕だちのふる

唐崎のまつにゆふひのかげきえて　増山喜三子
かたゝの浦にかゝるゆふだち

鳴神のひゞきのなたをくもすきて　溝口久爾子
とほざかりゆくゆふだちの雨

しなかどりゐなの笹原かぜたちて　南部　麻子
やがてぞかゝるゆふだちの雨

にわかにもすゞしき風の瀧ひきて　南部　銈子
ゆふだちかゝるあまのかく山

すみだがはこなたはゝれて夕立の　土屋　峰子
雲さわぐなりいまどいしはま

波風のおとさわがしくくもきほひ　大河内一子
ひゞきの灘をすぎるゆふだち

ひとしきりとくもすきゆく夕立に　酒井　鋏子
とねのかはなみたちさわぐ也

筑波ねのこのもかのもを回りきて　渡邊須磨子
とねがはわたるゆふだちの雲

川上はゆふだちすらしきよたきの　音はけしくもみづのにごれる　荻野美佐子

足柄のたかねをすきてみるからに　ふじのすそのに夕だちのふる　深見　愛子

沖つ風くもゐにふきてたつなみの　ひゞきのなだに夕だちのふる　河合喜佐子

山のなのあらしはげしき夕だちに　ゐせきたきなすなみのおと哉　水原末嵯子

むかつをに夕だち雲のきほひきて　みるまにかゝるむさしのゝ原　尾臺　靜子

夕立のくもたちまよふなにはかた　いりゑのあしにかせさわぐ也　勝田　筆子

かきくらしふりそゝきぬる夕立の　ゑるし涼しきみわのすぎむら　後藤可禰子

鳴神のおとはのやまやすきくらむ　みやこにちかきゆふだりの雨　飯田以禰子

雲よりも高くそひへしふしのねを　よそにすぎゆくゆふだちの雨　益子伊都子

みかの原ひかははさしてみねながら　ゆふだちすなりたまのゐの里　藤井　靜子

つくばねは夕立すらしときのまに　すたのかは水うはにごりせり　南摩　牧子

雲きほふ空にひゞきてなるかみの　おとはのやまに夕だちのふる　宮田　道子

鳴神のおとはくもゐのうへのなる　さくらかをかに夕だちのふる　宮木瀰勢子

薪こるしづもはれまをまつちやま　はやくもすぐるゆふだちの雨　諏訪　晴子

九月兼題

五日
- 歌……初雁
- 文……疾を訪ふ文

廿日
- 歌……名所擣衣
- 文……孝貞の解

敎の庭

八月廿日兼題　庭萩

（天地人の外は原稿到着順なり）

天　福島縣安達郡二本松高松岡　大鐘きよね

暮れなむと月まつやどの夕つゆに
ぬれていろこきいとはぎの花

地　愛媛縣新居郡西條町　川瀬きく子

一枝をとはるゝまゝにたちよれど
なほをりかぬる庭のたまはぎ

人　千葉縣佐倉宮小路町　植木鋼子

咲きしよりおかぬ日もなし朝な夕な
こゝろもつゆもにはの小萩に

片岡光子

庭の面に今をさかりのわきはぎの
をれぬばかりにおける露かな

青木はる子

露霜にまかきのゆひめやつるれど
いろはうつらぬわきはぎの花

石井德子

朝な〳〵露のやどりになりにけり
ながめうれしきにはのわき萩

相賀金子

置つゆの萩のにしきに色そへぬ
にはのまかきにてる月もかな

國分すま子

我がやどのひとむら萩の花さきぬ
しかのねさそふ夕かぜもがな

河野文子

折らずとも露ながら見ん庭の面に
さきいづるはぎの錦いくむら

羽田三緒子

秋たてはちくさの花にさきだちて
ほころひろむるにはのいと萩

羽田たか子

夕風につゆのしらたまめきみたし
はなのひもとく庭のわきはぎ

土生清子

夕露のおもけに見ゆるにはのはぎ
ねだもとをゝにさき出でに鳬

庭の面にうつしうゑたるわき萩は　上野かね子
たれに見よとか咲初めにける

夕風もすゞしくなりてきのふけふ　高井　米子
にはのこはぎの花さきにけり

鳴く虫のふけゆくまゝに秋のよの　磯部つや子
うはかせそよぐにはのたま萩

虫のなくこゑもさびしき秋のよに　平野　君子
かせふきさわぐにはのたま萩

我が庭のひとむら萩ぞ咲にける　岡　佐與子
さかのゝ秋やさかりなるらん

心あらむよきてふかなむ我が宿の　横敷たか子
つゆおくはぎのにはの秋かせ

袖がきのやれまぬはなむふく風に　吉田　芳子
はころびそめしいとはぎの花

置くつゆに月もやどりてわが庭の　吉田たけ子
はぎこそ秋のにしきなりけれ

夕風にみだれてもなほあさまたき　永井さい子
つゆおきむすぶにはのいと萩

置くつゆのおもけに見ゆる庭の萩　江馬　信子
にしきの上の玉かとぞおもふ

白露にたましくにはのわきはぎに　神田　春子
いつしか月のかげもやどれり

烏兎玉のよるも見よとやには萩の　溝口なほ子
はなにやどれる月のさやけさ

移しうゑし小萩か花もさきそめて　溝口　佳子
しかとふまでよなれる庭かな

淺茅生のしげれる庭もこのころは　溝口　秀子
はぎのにしきの咲き亂れけり

我がやどのにはの玉萩さきいでゝ　竹内美枝子
すがた優しく見ゑにけるかな

野路ならむ鹿もとはらむわか庭の　碓井　信子
つゆににほへるあきはぎの花

何時の間にしたはそめけむ庭の萩　碓井　武子
あきのさかりを始めてぞしる

處せきにはのあきはぎおくつゆに　碓井和可子
にしきをそへて咲き亂れけり

秋はぎの花しさけれバ野べのこと　竹内　淑子
にはにもむしの聲ぞきこゆる

此の頃の萩ある野邊やいかならん　瀬戸さと子
わかにはこそは今さかりなれ
朝な夕な庭もせにこそさきみつれ　佐々有隣子
つゆにおきふす萩のはなつま
我かやどのにはの秋萩さきしより　徳永ます子
をのへの鹿のこゑぞかよへる
鹿のねもきくこゝちせり庭の面の　徳永輝子
はぎが花つまさくにつけても
立ちよれどそでも袂もむらさきに　千々波橘子
ろめなすにはの秋はぎのはな
いざけふは友をまねかん我が宿の　内田たけ子
庭のあきはぎはなざかりなり
置きそはる露も花かとおもふなり　大橋兼子
にはのはぎ原さきのさかりは
眺めにもなほ眺めてもあかぬかな　大橋廣江
いまをさかりのにはの秋はぎ
我が見ても床しかりけりおふしてし　野尻鶴子
にはの秋はぎさきにほふころ
池の面にうつるも清しおひしげる　菅谷こう子

にはのま萩のさきのさかりは
朝きよめはらふもをしや秋はぎの　薬師寺芳子
つゆににほへる花のまさかり
置く露もおもけに見えて袖がきに　川瀬しげ子
かゝりてさける庭のいとはぎ
宮城野の秋もおもほゆそでがきに　高橋政子
さきあまりたる萩のさかりは
露むすぶ庭のまがきのはぎのはな　高橋千代子
けさうるはしく色みえにけり
置く露の眞玉しらたまぬきとして　藤澤元子
おるかそのふの萩のにしきは
萩の戸をとざすむかりにさき匂ふ　山田先子
はなのさかりは清めだにせず
軒はまで花のにしきとなりにけり　横山きみ子
にはのま萩のさきのさかりは
我かやどの籬のこはぎさきしより　大橋てい子
のべにこゝろは移らざりけり
身におはぬ錦なるらむしづがやの　松田靜枝
まがきにまとふいとはぎの花

庭にさへ萩のにしきをきてけり　　松田　孝子
　いかなる人のすまひなるらむ

我が宿のにはにも秋のおとづれて　　降田　槇子
　ふるえのはぎは花さきにけり

わが宿の垣根もたわに咲くはぎの　　黒澤　松枝
　露をたづねてやどる月かげ

咲くまではまつまもながき草萩の　　阿南　良子
　にはにちる日やこゝろせく覧

またれつる風もなか〱いとふ也　　阿南　圭子
　庭のくさはぎはなのさかりは

またれつる風もなか〱いとふ也　　河原　春子
　庭のくさはぎはなのさかりは

わがやどの小萩が枝におくつゆに　　溝口　佳子
　やどれる月のかげも匂へり

八月廿日兼題　秋田家

天　長野縣長野町　吉田　芳子

萩の上風やう〱身にしむ頃にもなりぬれどいづこも同じといひけむ秋の哀はさるものから田舎のわび住ひこそわきてさびしけれ窓おし開きながむれど高ねの雲のだゝすまひ田面にひきならす引板の音なども常ならぬをましてすみ染の夕になりぬれど雲井遙になきわたる雁がね軒ちかく來なく鹿のこゑ何れも哀をそへざるはなしやう〱夜の更けゆくまゝにくまなき月影は千草の露に光りわびなき弱りたる虫の音はたえ〱なる遠方の砧に通ひて實に哀の限りにこそ

地　大坂市西成郡今宮村　松田　靜枝

夕霧深うなりて鶏の聲はのかに聞ゆるをり鞍にあまるむかり足穂の稲を負ひたる手飼の駒を牽きつゝ節をかしげに豊年の歌を唱ひて野徑を飯る賤の男のやう〱家路に近づけど耳馴れし駒の嘶きにそれと覺りて門邊に出迎へて稲とりおろすなつかしの妹あり疲れにけりといひつゝ沐浴はつれば心むかりの夕飯にむかひ粗食濁酒に舌つゞみうち世にも嬉しげなる笑みをふくみてことしも樂しき秋よと語りいでたるさまげに現世に極樂のありとせむかゝる里をやいふべからむ

八

岡山縣岡山市 降田植子

秋風にそよ〳〵と稲葉の音たつる田の面を見渡せば五月雨の晴間をまたで少女等が早苗とりしもまだ昨日今日と思ひしに今は金をもとかすと云ふ夏の暑さもなごりなく去りてさすがに秋めく比とはなりぬ早稲といふたぐひは色少し黄ばみて穂なみもおほかたろふばかり彌生ひ立ちたれば人に案山子たてゝんとてわらなどもてさわげるもいとをかしかなたのおしねは根いと太くたけ高う生ひ出で露の白玉を葉毎にとめて今にも穂の出でんさまげに豊けき實のりのほどもしるく民艸の喜びさこそと思ひやられぬをりしも學校より歸るわらはべの聲たからかに「うたふよ踊るよ何處の民もはゝ〳〵はゝ〳〵嬉れしき庭に」と一人が云へばまた一人が「翁もわらはもたのしきにはにうれしや樂しや今年の實のり」とふしおもしろううたひつゝ過ぎ行くも心ありげに聞えていとめでたくなん

岡 佐波子

秋はなべて淋しきものなるにまして夕月のさやけきかげは田一面におきわたせる稲葉の露にはえ山奥にはをしかの妻こふ聲などなか〳〵言の葉にもつくし難くなんさるに賤か伏屋には其淋しさをも打忘るゝばかりにいそがはしく晝はひめもす男子女子の別ちなく里うたうたひて稲をかり取り夜はよもすがら明日の支度に何くれとなく打働らきてひたすら獲物の多くあれかしといのり居るのみにて更らに〳〵秋の哀れも知らざる如くになんさるは暑さ烈しきみな月にも又さみだれのふり續く時にも一日もおこたりなく田に出でゝ能く作り小さき早苗の時より大きなる穂の出るまでの苦勞はやがて豊かにみのるをひたすら樂しみに思ひてなり故に秋を秋ともおもはぬは實にことわりになん

竹内 淑子

なきわたるかりのこゑにねざめしてあかつきのそらにしかのなくねをきゝ月にいでしいねの風におきふし去てひかぬなるこの音するもさびしく入あひのかねのねをきゝては今さらにあきのこゝちな

むするまして都にてはきかざりしひぐらしのこゑもきこえてこゝはすみなれし人さへかなしといへどきのふけふやどりせる我みにはいとこゝろぼそうなむかくて夜ふけゆけどいなすゞめのこゑもきこえずはるかに見えし山も見えずなりていなばのそよぐおとのみきこえて千ぐさのかげになくむしもわきをかなしふにかどいとあはれなりされば朝なく〳〵山田のかりいほにいでゝわしたにはつゆにぞてをぬらし夕べにはつまこふるしかのなくねをきゝつゝおぼつかなくも一夜をこゝにわかす山田守ころいと心うきかぎりならめどぞ

佐々有鄰子

わせおくて己にみのりてあからみわたり門の栗生も八束足穂に世の豊なるけしきをそへつるに衣かりがねの空高く聲たてゝ軒どよちかききり〴〵す里の童が駒ひきわたす轡むしまつ虫鈴虫さへいとどあはれをもよほしぬをりしも一むらすぐる時雨の雨も袂露けきに田伏のいほのそなたより雨三點の蓑衣のおとの耳つらぬききこゆるなど秋情のたへがたける筆とりいでゝ思ひを紙屋川にかきながすになん

菅谷こう子

思ふどちと山端の松より出しうき雲のかゝらざる月をながめ又野邊の千草を分出のすだく音きゝ庵守る田子の鳴子ひけどむらかる雀もおもしろし打わたす小田の細道をちこちに稲かけたる賤が男鎌もてる賤の女早稲田かり穂なみよる中粳かりはすかりしはにせわしうむら〳〵見ゆるをしねもいろつきぬみのれる五こくをねむるにいそがわしう秋の田家の秋ぞしるさ苗のつかれも打わすれもろこゑ高くさわぐなど夕げの烟にくるゝをしり細道たどりたそがれに月かげふみ初雁の聲に送られ家路にかへるさきなど云はむ術もしらざる程になむ

文部省檢定濟

副島伯爵校閲　東久世伯爵著　松本楓湖畫

書名	冊數	定價
尋常小學修身入門	全一册	一册金二錢八厘
全　教師用	全一册	一册金七錢
尋常小學修身書	全四册	每册金七錢八厘
全　教師用	全四册	每册金十二錢
高等小學修身書	全四册	每册金九錢七厘
全　教師用	全四册	每册金廿五錢
尋常小學國史談	全二册	每册金十錢
高等小學國史	全三册	每册金十九錢
尋常小學修身書掛圖	全部	

發兌所　國光社

女鑑第六十八號目次

社告

○代價は郵便爲替小爲替銀行爲替及[illegible]にて本社へ御直[illegible]之事○[illegible]東京[illegible]取扱所へ御送込可被下事○[illegible]を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に[illegible]す代價領收の上は直に女鑑を發送すべし若[illegible]て領收證を要せらるゝ方は別に[illegible]の事○[illegible]は一切受取不申候事

女鑑

每月[illegible]回發行
定價[illegible]錢
三ヶ月[illegible]
半ヶ年[illegible]
一ヶ年[illegible]
[illegible]一行金[illegible]

明治廿七年八月廿七日印刷
同年同月廿八日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衛
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所　國光社